る。而かもそれを吾々はどうすることも出來ない。勿論性慾の眼覺めると同時に、其滿足を與へることは、個人としても社會としても上乘の策ではない、或一定の年齢に達するまで自制を守る必要がある。私は嘘を諸君に言はない、卽ち自制が常に容易だと言はない。或一定の年齢までの自制は避くべからざるものである。而してこれを善用することは、諸君の叡智の問題である。廿二歳までの禁慾は、たとひ害があるとしても極めて僅かで、それも害といふよりも寧ろ、精神の憂鬱を伴つた不快と焦燥との感じである。若し青年が大いに意志の力を働かすか、或は終始多忙の生活をして居れば、其困難は、不可能といふ程度ではない。斷念しようとの强い自發的決心は、意志に良好な結果を與へる。――これは私の信念であるが、諸君を禁慾的自制の勝利者ならしめる原因は、他に今一つある。それは性慾が所謂昇華(ノーベルファン)(熱して同體を氣化せしめた後、冷却して再び凝結せしめ、以て不純物を除去すること)の道程を辿るのである。卽ち性慾を構成する精力、神經、精神的要素などは、若し常態で費消されなかつた時は、高尙にし醇化することが

出來る、換言すれば、他の水路に轉じて費されるのである。怠惰者、或は精神的に劣等な人間は、其性慾を抑制することが殆んど出來ない。然し教養あり理想ある人間は、其性慾を醇化して、科學の研究或は文學、繪畫、彫刻、音樂、社會公共事業などに沒頭する。吾々の屢〻見る青年の熱烈な宗教的感激は、要するに、此醇化された性慾の發露に過ぎない。

然し、結論は正しくしなければならぬ。ある一定の年齢まで性慾を醇化することが出來たから、永久に禁慾は無害であり醇化されると考へたならば、それは誤謬である。人間は小量の食物を攝取しただけで生活されるが、無食では生活されない。但し食物の場合とは違つて、性慾機能は、生命に關する機能ではない。禁慾したからとて死ぬることはない。然し人間の肉體と精神との幸福の爲めには、適度の性慾滿足が必要である。而して私の意見に依れば、廿二歳乃至廿五歳以後の青年が絕對禁慾をすれば、必ず性的精力に損害を受けるか、精神的研究の能力を毀損されるかする。卅歳乃至卅五歳の絕對的禁慾者で、性的精力に惡影響を受けない者は、極めて少數で、

ある。然しそれが生殖不能になるといふ意味ではない。四十、四十五、五十歳まで禁慾生活を續けた者でも、結婚して忽ち子供を持つことが出來る。卽ち精子は全然影響を受けないのである。惡影響を受けるといふ意味は生殖行爲の微力、卽ち多少性的不能になる場合があるといふことである。勿論全然交接不能となつて、勃起もせず、勃起しても直ちに射精するといふ例は屢、見受けるところである。而して神經衰弱となつて、種々の神經障害に惱むこともある。

以上が此問題に關する眞理、世界第一流の性慾研究學者の同意する眞理である。これは最初から何等の偏見なしに研究されたものである。

禁慾の問題に就いては尙ほ言ふべき事が多い、然しそれは他日の機會に讓る。此處では繰り返して、「定年を過ぎての禁慾生活は無害である」との說が、根本的に間違つて居ることを特に言つて置く。此誤謬は故爲に主張されることもあり、無智の爲めに主張されることもあるが、其動機は共に善い。然し動機が如何に賞すべきであつても、虛僞は虛僞以上に出ない。眞理を傳へるに越したことはないのである。

第三十二章　結婚

結婚は人間生活の最も重大な階段である。人間は結婚の爲めに時に生命を與へられ、時に生命を奪はれる。幸福な結婚に必要な凡べての條件を、簡單に說くことは無價値である。其理由は、第一、幸福な結婚の爲めの凡べての條件は、人間が戀愛に陷つた時に悉く放棄されて仕舞ふ。而して戀人は其原則と彼の決心とに反してまでも所思を慣かうとする。第二、吾々は未だ如何なる條件が結婚に適して居るか、卽ち幸福な結婚と不幸な結婚との特徵は何かを斷言することの出來る程、知識を持つて居ない。餘りに多くの人々が失望する。唯戀愛結婚者は、最初の間は琴瑟相和するが、後には多くの場合不和となる事實だけが、一般に知られて居る。

然し、幸福な結婚の根本的條件の二三を吾々は知つて居る。其第一の條件は、性的健康と性的精力とである。單に花柳病に罹つて居ないことだけでは、充分ではない、性的不能であるかないかを仔細に調査しなければなら

ぬ。他の條件が凡べて滿足だとしても、卽ち、兩人共に性質は善良であり、經濟は富裕であり、身體は壯健であるとしても、若し、夫が性的不能に陷つて居たならば、此結婚は幸福となることが出來ない。(唯一の例外を除いて。其例外とは妻も亦性的不能である場合)殆んど凡べての場合、これは悲劇である。私の考へに依れば、夫が花柳病に罹つて居た場合よりも、更に不幸であり悲劇である。嘗て私の說いた通り花柳病は、何等かの方法を用ゐて感染させないことが出來る。然るに性的不能は(殊に不治の永久的性質を帶びて居たならば)如何ともする術がない。

現代に及んで、嘗て花柳病に感染したことのある者で、近く結婚しようとする者が、結婚前に醫師の診斷を乞ひ、病毒の痕跡があるかないか檢査し、且つ性的に健全かどうかを調査する傾向の見えたことは、非常に喜ぶべき進歩の兆である。而して一方で彼等は、遺傳其他の必要なことを凡べて知りたいと希望する。――かうした風習が、識者の間に流行して來る。結婚前に醫師の手で研究調査する位確實な賢明な方法はない筈である。此が將

來、結婚後の夫妻を不幸から救ふ。書物のみを以て個人的忠告乃至個人的助言を述べるは無理である。忠告、助言は、個人的に相對してしなければならぬ。何故ならば、或人に適當な忠告も、他の或人には不適當だからである。其上問題の性質上、書物では精細に說明しかねることが多い。著者に、一切を細密に表現する能力と知識とがあると假定する、而して一般の識者が誤解又は曲解しないと假定する、然し現代の檢閱官は(たとひ現在より寬大になつたとしても)それを許さない筈である。既に一切を詳細に說明することが出來ないとすれば、許される範圍內の說明だけをしなければならぬ。

新婚の夜。新婚の夜は女の一生中、最も重大な轉回點である。其夜の夫の態度如何は、非常に妻の態度に影響をする。男子にとつては、新婚の夜が必ずしも最初の性的經驗ではないが、女子にとつては多くの場合、最初の經驗である。此事實は吾々がよく記憶して置かなければならぬ。然し現代に於ては、非常に老成た少女が居て、性的關係の交際には觸れないが、理論的に教へられた爲め、新婚の夜を樂しむ者がある。勿論かうした場合に就い

ては、私として特に言ふべきことはない。然し老成た少女があると同時に、其性的經驗の最初を恐危卷惧とを以て迎へる少女も多い。而して此場合が、現代にあつても普通である。

頗る信じ難い事實であるが、今日尙ほ、新婚の肉體的關係に就いては、極めて漠然とした知識しか持たないで、新婚の夜に臨む女子がある。又、非常に敏感、纖弱な女子で、其處女膜が極めて强靱である爲め、新婚の夜の性的行爲が、實に甚だしい苦痛を伴ふこともある。此場合、若し夫たるべき男子が、賢明であり思慮あれば、處女膜を亂暴にも無理に破らうとしないで、徐々に其ことを待つに違ひない。或者は、完全に交接の出來るまでに數夜を費すかも知れない、然し夫の思慮ある態度は、永久に妻の感謝することろである。

吾々は又次のことも知つて置く必要がある。——或種の淫猥な書物を讀んだり、既婚の友人から卑しい暗示を與へられたりした爲めに、非常に好奇心を唆られた女子は例外として、多くの若い女子は、性的關係に對して普通男子に見る程の慾望を持たないものである。單純な意味に於ける戀愛、

接觸、愛撫などの慾望は、男子よりも强いが、直接交接の慾望は弱いものである。多くの場合に、女子は其慾望を全然缺いで居ることもある。それ故女子は、性的接觸を慾望し享樂するやうになるまでには、數年間を、性的生活と性的教育とに捧げなければならぬ。

以上の理由から、妻の愛慕と感謝とを受けようと思ふならば、先づ結婚生活の最初の數週間を愼重にしなければならぬ。勿論さうでない場合、妻自身が熱情的で、幾度も性的滿足を欲することもある。此時は、夫の健康の許す範圍内で、其慾望を充たすがいゝだらう。

度數。醫師は屢、正しい性的關係の適當な度數を訊かれることがある。これに就いては既に私が他の著書(性的不能の處置及び性的變態)で論じた。此處では唯其根本的原理だけを述べる。元來性的世界に於ける各人間の差異程著しいものはない。ある者にとつて適當な度數も、他のある者にとつては不適當である。然し極めて簡單に言つて仕舞へば、性的關係の度數は、廿五歲から卅五歲までの間、一週に二回、三十五歲から五十歲までの間、一

週に一回それ以上の年齢になつては十日に一回或は一ヶ月に二回。――以上の度數を越えないやうにしなければならぬ。勿論、此標準は極めて大ざつぱであるから、個人々々の健康と精力とに從つて相違するであらう。五十歳、六十歳になつて、卅五歳の者よりも性的精力を持つ者もある。又、職業の相違に從つて相違する、例へば智的研究に沒頭する者は、單に肉體的勞働者よりも性的精力に乏しい。これ等種々の例外はあるが、大體に於て、上述の標準は正しい。而して青年時代から此標準を守つた者は、老齢になつて後に尙ほ、性的精力の裕かなものがある。

月經中の交接。多くの女子は、其月經中に平生よりも更に烈しい性的慾望に襲はれて、滿足を夫に强ひるものである。其爲めか、夫は時々醫師に向つて、月經中の交接に就いて有害か無害かと訊くことがある。

勿論、月經中は性的關係に觸れてはならないものである。若し强ひて交接すれば、往々にして子宮及び卵巢(女子)の炎症を來し且つ尿道(男子)の加答兒を來すことがある。然し、昔の說――月經中の接觸が非常に害毒を釀し、

爲めに悲慘な結果を生づるといふ說は、全然科學的根據のない、取るに足りない俗說である。有害であるとしても、それ程に著しいものではない。常に月經中の接觸をしながら、何等の障害にも會はない男女は極めて多く見るところである。

寢床の問題。夫婦が同一の寢床に寢るか、別々の寢床に寢るかとの疑問が、近來は屢、醫師に向つて發せられるやうになつた。

私は別々の寢床がいゝと思ふ。第一に衞生上、第二に性的健康のためである。夫婦が常に同一の寢床に寢れば、別々の場合よりも必ず接觸が頻繁になる。而して其頻繁の結果は、夫の性的精力を弱め且つ夫婦共に飽滿する。此飽滿の結果が、夫婦間將來の和樂を破るのである。それ故、出來得る限り、單獨の寢室を選ぶやうにするがいゝ。但し現在の我國(アメリカ)の經濟狀態では、凡べての人々が單獨の寢室を持つといふことは、些か贅澤の傾向がないでもない。

更にある論者は、夫婦は同一の家に住むべきではない、單獨に離れた家に

別れて、時々訪問すべきであると言つた。此論者の意は、かうして初めて最初の戀愛が、永久に凋落せずに保持されるといふのである。然し此問題は此處に論ずる必要がない程、アカデミックな論である。

單獨の寢床にすること、夫婦が時々別居すること(これが心理的に必要だと說く者がある)の必要は、必ずしもあらゆる夫婦に是認される問題ではないと考へられる。何故ならば新婚の夜以來、寢床を同一にしながらも、放縱にもならないし、飽滿にもならない夫婦が隨分多くあるからである。彼等は別々に寢ては眠れない。寢床を共にして初めて安眠する。但し此狀態が感ずべきものかどうかは、別問題である。上述した私の意見の通り、夫婦は最初から寢床を別にするがいゝ。然しかく迄其習慣に慣れた夫婦にとつては、恐らく寢室別居論も是認し難いことであらう。又、私の知人で、廿年間一日も別居したことのない夫婦がある。而かも彼等は別居しようと考へないのみか、數時間を會はないで居ても忽ち不安になる、卽ち彼等は一緒に居る時が一番いゝ。(紳樣の羨む夫婦といふのは此ことだ)夫は妻を、妻は

夫を、各自の半身と考へてゐて、若し瞬間でも別れて居ることになれば、其半身の缺けた不安を感ぜずにはゐられないのであらう。

此事實は吾々にかう敎へる。——人間相互の關係に就いて確言したり、人間行爲に就いて法則を定めたりする場合に、決して獨斷的にしてはならない。人間が相互に異ると同じく、其人間の法則も、夫々異るべきである。

第三十三章　賣淫

賣淫の起原、其意義、其原因、其危險、其救濟、其減少などの問題を、此處に說くことは出來ない。それを說き盡すには相當大部の書物としなければならぬ。此處では單に必要な數點を示すだけである。

(一)　賣淫及び亂交は、太古、歷史の第一頁から始まつて居る。而して恐らく今後も綺麗な形式で永久に存續するであらう。商賣上の賣淫は、或は止む時もあるかも知れない。然し不義の關係は何時の世にも續くものである。

(二)　賣淫は花柳病の主な原因である。職業的でなくして稀に賣淫する不義の女の方が、職業的賣淫者よりも寧ろ危險である。職業的女子は、常に花柳病と姙娠とを妨止する方法を適用する。不義の素人はそれを知らないで感染する。

(三)　賣淫が社會に齎した害惡は、大半社會自身の罪である。誰しも、極度

の侮辱と打擲とを受け、人非人として扱はれたならば、此社會に對して復讐する權利がある。彼女等が、現在以上に慘酷な復讐をしないのが、寧ろ不思議といふべきである。賣淫は、現代社會の經濟組織の犧牲、遺傳及び性慾本能の犧牲に過ぎない。彼女等は侮辱と慘酷とを受けるべきではない、深い深い憫憐を受けべきである。彼女等、賣淫者を先づ人間として遇するがいい。彼女等も亦人間らしく振舞ふに至るであらう。

(四)　賣淫者が凡べて花柳病に罹つて居るとの說は誤謬である。職業的賣淫者中の高等階級は、各自に注意するから却つて花柳病は稀である。

(五)　賣淫者が通常精神的缺陷のある女だとの說は誤謬である。中には相當教育ある者もある。

(六)　賣淫者が道德意識を缺くとの說は誤謬である。性的生活だけを例外とすれば、彼女等も多くの美德を持つて居る。屢〻、親切で、寬大で、快活で、犧牲心などに富む女が居る。「眞に高潔な性格の所有者が多い」とは、彼女等の社會を知る者の言葉である。病氣に臥す母や姉妹、學校に通ふ兄弟などの

爲めに、賣淫の悲慘な生活に陷つて居る女もある。

(七) 賣淫者は短命で、賣淫的職業に入つてから、四五年の間に死ぬるとの說は誤謬である。彼女等の生命も普通人と同じである。

以上によつてみる如く、要するに賣淫に關する現代の知識は、訂正されなければならぬ。

第三十四章　性慾教育

子供性慾教育の大體或は順序を說くやうにと、私は屢〻乞はれた。多くの兩親、殊に私が普通の方法乃至書物に滿足して居ないことを知る兩親は、「性慾の教育はどうしたならいゝでせう。子供にどう教へたならいゝか」などと訊く。私は今此處で、出來るだけ簡單に、此質問の返答をしてみようと思ふ。

先づ第一に、子供を教育するには、其雰圍氣が最も大切だといふことを忘れてはならない。父親母親共に啓發されて居て、生殖器又は生殖機能を極めて自然なことであると子供に認めさせるやうに教育する、他の諸器官、諸機能と同樣に自然で、決して恥づべきものでもなく、小聲で話すべきものでもないと考へさせる。――かうした進步の雰圍氣が、子供の身邊にあれば、私が多く言ふ必要はない、單に些少の暗示さへ與へれば充分である。

兩親が性慾は汚穢なものであるといふ中世紀時代の思想に浸潤して、必

要ではあるが害惡であると考へ、而して兩親と子供との間に何等內面的の關係がないといふやうな、――かうした惡い雰圍氣にあつては、子供の性慾教育は望めまい、困難であり不可能である。或家庭に於ては、子供に直接何事をも教へなかつたが、而かも其子供は驚くべき社會的理想と性慾的理想とを懷いて居た。然るに他の或家庭では子供に直接其すべきこと、すべからざること、有害なこと、有益なことなどを反覆して說明したにも拘はらず、遂には性的不良少年となり終つた。此二家庭の差異は要するに子供の周圍の雰圍氣に依る。適當な雰圍氣(前者の場合)と、不適當は雰圍氣(後者の場合)との差が、子供の將來に影響した結果である。兩親と子供との間に適當な信賴と愛の關係とがある場合と、ない場合と、又同樣である。

極端な禁慾的宗敎的な雰圍氣に於ける敎育は、子供の爲めに不良である。放縱な手淫者乃至遊冶郎は、多く此種の家庭に育つた者が多い。異性を交へて而かも野卑猥雜のない雰圍氣、愉快な快活な雰圍氣が最上のものである。二歲から二十二歲に至るまでの成長しつゝある少年少女を持つた家

庭では、猥褻な戲談、猥褻な行爲は嚴禁しなければならぬ。此處で注意したいことは、親達が一般に、子供の觀察力、理解力、記憶力などを低く評價して居ることである。子供は親の考へたよりも進步したものである。例へば、四五歲の子供の面前で、親達には他人が屢〻、青年男女の面前ではしないやうな或ことをする。子供だから注意もしまい、意味を理解しまい、覺えては居まいと彼等は呑氣に考へて居る。然るにこれは大間違で、事實、子供は、たとひ外見遊戲に耽つて居るときでも、眠つて居る時でも、頗る敏感な觀察者である。而して其或話、其行爲の意味が、或時こそ子供に解らなかつたものゝ、數年の後まで記憶して居て初めて其意味を悟る。勿論、これは有害な結果を與へる。

子供の性慾教育を春機發動期から始めるといふ考はいけない。其他九歲十歲から始めるといふ說もあるが、要するに生後直ちに始めなければいけない。先づ生後數ヶ月を經て、割禮を施すがいゝ。手淫の機會を與へないため、汚垢を殘留して疾病を釀さないため、割禮が如何に效力があるかは、

既に再三私の說き來つたことである。

子供の全身裸體は奬勵すべきである。一日二三時間の割合で裸體のまま遊ばせる。同年位の女の子があれば一緒に裸體で遊ばせる。子供は異性の生殖器を見慣れて仕舞ふ。それ故異性の裸體を初めて見た好奇心(其結果は不自然な行爲の原因となることがある)を除くことが出來る。

一般教育に關しては、本來の範圍外であるから說くべきではない。單に二三の項目だけを竝べる。先づ健康になる爲めのあらゆる方法を盡すこと、意志の力を發達させること、理性の力を啓發すること――此の三つを完全に教育することは、一般教育以外の性慾教育にとつても必要なことである。

子供の必ず發する質問「私は何處から來たか」に對しては、修飾なしにかう答へるがいゝと思ふ。「お前はお母さんの身體から出たのです。はじめは生命(いのち)のない塊だつたけれど、それをお母さんが血で育てたので、段々お前が大きくなつて來た。そして愈々お前が强くなつたので、お母さんのお腹から

飛び出したのです」。而して子供には、出來るだけ早く各種々の植物の成長、卵を破つて出る雛鷄其他の生殖を知らせるがいゝ。其類推を以て明瞭に說明することが出來る。然し此說明で子供が滿足せずに更に質問を繰り返すやうならば、實際の話を聞かせるがいゝ。子供に生殖の實際を知らせては道德心を傷つけると考へるは愚である。適當に聞かせたならば、却つて母親に對する子供の愛慕を更に增し、やがては一般女性に對する公平の態度を養ふのである。

「私は何處から來たか」といふ子供の質問に、例の鵠の鳥の話などをするは問題外であるが、成るべく中心を避けたいといふので植物の繁殖や蛙や鮭や條蟲などの生殖を聞かせるのは、何れも賞すべきではない。人間の固有の研究は、矢張り人間を例に取らなければならない、卽ち人間の性慾研究は、人間の性慾を對象としなければならぬ、植物や動物の本能とは別個のものがある。

十歲、十一歲(發育の遲い子供は十三歲)位になれば、機が熟して來るので、簡

單な、然し的確な生殖器の解剖と生理とを教へるがいゝ。何人も生殖器の解剖と生理とに關して多少知つて居なければならぬが、同時に消化器と泌尿器との一般を知る必要がある。或る人は言ふ、生殖器の解剖、生理衛生などの大體を教へては性慾の眼覺めに障害を起すだらうと。然しこれは全然愚論である。時に手淫癖を矯正したり、不自然な接觸を防止したりすることはあるが、障害などのある筈がない。

手淫の問題は何人の頭をも領する問題である。手淫を救濟するには、先づ豫防するが第一である。一旦習慣になつた手淫は簡單に救はれない、若し世間の父母たる人が、第七章に說いた幾多の方法に從ふならば、手淫癖に陷る危險は比較的減少されるだらう。又たとひ陷つて居たとしても、子供には親切に正直に、其害を教へなければならぬ。決して罪人扱ひにしてはならぬ。よくない習慣だ、これを繼續すれば最後に身心の衰弱を招くと簡單に教へる必要がある。人並に成長することの出來ないこと、强くはなれないこと、勉强もよくは出來なくなること、試驗も落第するかも知れぬこと、

――これ等を子供に說明する。子供は意志の力が發達して居たなら、大した困難もなく手淫癖を免れるであらう。然し親たる人は注意して子供を狼狽させてはならない。其一生を悲慘にさせてはならない。而して甚だしい害のあるのは、過度の時だけで、一度や二度の手淫は心配するに及ばないことを教へなければならない。同時に、人の面前で生殖器に關する話をしてはいけないこと、自分又は他人の生殖器に觸れることは非常に惡い癖だといふことなどを教へなければならない。

子供が次第に長ずるに從つて、夢精のことを說明する。これは自然の現象で、心配すべきことではない。然し一週間に一度以上襲はれるやうなら、父親に告げるやうに教へなければならない。

十三歲乃至十六歲位になつた時、花柳病を說明する。亂交する娼婦などの危險であること、誰しも此種の女子を避けなければならぬこと、花柳病、殊に黴毒と痲病との恐るべき症狀などを說明する。但し例の通り決して誇張しないがいゝ。十三歲乃至十五歲の少年が性慾の眼覺めたものとして、

現代の社會狀態では、廿歲乃至廿二歲位までは童貞を守るがいゝと說明する。禁慾の困難を敎へた後、廿二歲位までの禁慾は些少の害しかないものだと敎へる。

然し其年齡を過ぎた者には、例へば廿四、廿五歲位の者には如何に敎へるか。これは其各人の性慾の强弱に依るより外はない。卅歲になり尙ほ禁慾するに困難でない者もあらう。元來性慾の微弱な者にとつては容易である。科學的研究に沒頭する學生など比較的に容易であらう。彼等は時に性慾の不滿に惱む、然し其苦痛は輕く、其害は少ない。然し世の中には廿二歲、或は廿五歲以後の絕對禁慾が、肉體的に不可能な者がある。彼等の精神的、肉體的苦痛は憐れむべきものである。睡眠不能、飲食不能、精神四散—而して性慾との爭鬪に凡べての精力を奪はれて、遂には憂鬱症となる。かうした人間は勿論結婚すべきであるが、何等かの理由があつて直ちに實行されないとすれば、娼婦に接觸するも亦止むを得ない、但し花柳病の傳染を防止する爲めの方法を用ゐなければならない。酒類に泥醉しない人と、

相手の女を多少選ぶ人とが豫防法を講じたならば、大抵の場合、病毒に感染するものではない。青年が何かの機會で、處女に觸れる場合も亦豫防法を應用するがいゝ。

以上が出生から廿歲乃至廿五歲に至るまでの性慾敎育の順序である。而してこれには一點の誇張も、一點の虛僞も、一點の妥協も含まれて居ない。これは實行の出來る生きた順序である。而して其上に道德的順序である。何故ならば、個人と種族との幸福に貢獻するからである。萬人を益して何人をも害しない。此順序に從へば、先づ健全な幸福な青年となり、やがては健全な幸福な父親となる。

世の中には、實行の出來ないことを說き立てゝ、識者の嘲笑を買ふ山師的醫師がある。彼等が書物なり講演なりで說く虛僞は、殆んど何等の益を與へないで害のみが甚だしい。三つの害惡を社會に蔓延せしめた責任の過半は、彼等の負ふべきものである。三つの害惡とは、手淫、性的不能、僞善である。

後篇　女子の爲めの性的知識

第一章　緒言

少女の性的教育は、少年の性的教育よりも更に必要である。其第一の理由は少女の過失が少年の場合よりも更に悲慘な結果を釀すからである。例へば、少年の場合に於て、其過失から生ずる悲慘は、其性質上、單に肉體的結果に過ぎない。然るに少女の場合、其同樣の過失は、肉體的であると同時に、道德的、社會的、經濟的結果を釀すのである。これを具體的に言ふと、若し、少年が、其無智の爲めに不自然な性的關係に沒頭すれば、其結果として花柳病に感染するかも知れない、然し決して不道德であるとは認められない、侮辱もされず非難もされない、其社會的地位に何等の變動をも受けない。而して花柳病さへ全治すれば、結婚することも容易である。妻に結婚前の過失を强ひて隱蔽する必要もない。然るに少女の場合、其結果は實に悲慘であ

る。單に肉體と社會的地位とに影響を受けるのみでなく、其生命の犧牲をも拂はなければならぬ。花柳病に感染するは勿論、時として姙娠する。此姙娠は現代の社會狀態に於て、殆んど致命傷であると言つていゝ。若し私生兒を產む不面目を免れようとすれば、墮胎しなければならぬ。而かもこれは生命をも奪ふ事がある。若し私生兒を產むとすれば、人眼に觸れない場所に隱して、一日も早く死ぬることを祈らなければならぬ。而して又多くの場合、私生兒はさうした暗い運命を持つて死ぬるのである。然し若し死なゝかつた時は、一生を通じて、其母親なる女子は、過去の罪惡が發覺しはしないかと煩悶する、常に恐怖に襲はれる。勿論彼女は夫を望むことは出來ないが、假令結婚が出來たとしても、常に其結婚前に犯した罪の幻影が鮮やかに見える、而して結婚生活の數年の間に、不幸にして夫に其秘密を發見されるならば離婚の憂目を見なければならぬ。夫が非常に廣量の人であり且つ彼女を眞實愛して居る場合、結婚前に一切を白狀して夫がそれを許した場合、此二つの場合を除けば、彼女の生涯は絕えざる苦惱である。

又假令彼女が姙娠しなかつたとしても、不義の性的關係を犯した事實だけが曝露されて、其爲めに彼女の社會的地位は奪はれ、或は社會から追放され、或は今後結婚したり彼女自身の家庭を造つたりする機會を逸する。――彼女は何時までも社會の日蔭者となり、孤獨の漂浪者とならなければならぬ。

以上、少年と少女との過失の結果は、如何に甚だしい差異があるか明瞭である。此理由があるからこそ、少年の場合よりも、少女の場合に更に性的教育の必要が認められる。

但しこれが唯一の理由ではない。他にも一二の理由がある。其第一は、かのバイロンが、其有名な詩に適切な句を書いて居る。

「男の戀は、生涯中の一部分をしてゐるものであり、女の戀は、其全生涯である。」實際、戀は女子一生の仕事である。

近代の婦人中には、或は此說に抗議する者もあらう。彼女等は言ふかも知れない。――これは過去の女子にのみ適用される眞理である。人類の活

動には何等の權利をも持たなかつた女子のことである。現代の女子は、戀以外に多くの興味に觸れて居ると。

然し此說は極めて少數に對する眞理である。而かも其少數の女子さへも、其携つて居る社會的、科學的、藝術的活動を、戀と同等に見る事は出來ない。——如何に多忙な時でも、如何に成功した時でも、戀が無ければ女子は寂しいものである。戀愛生活の滿足があつて、初めて女子は幸福である。何物を以てしても、戀の空虛を充たすことは出來ない。活動して空虛の表面を蔽ふことは出來る、人眼に觸れぬやうに隱すことは出來る、然し充たすことは出來ない。何故ならば女子は元來戀の爲めに創られたものであるからである。從つて、其生涯を通じて戀に觸れない女子は、人生の落伍者と言ふべきである。二三の例外はあるが、多くの實例が、此こと を證明して居る。

女子の性的生活が、男子のそれよりも重大であることは、單に精神的方面のみでなく、同時に肉體的方面に及ぶ。卽ち女子は、男子よりも、其月經作用の爲めに一層性を意識し、肉體を拘束される。十三四歲の頃から四十五、五

十歲頃に至るまで、月經は每月循環して、自分は女性である、性の生物であるとの自覺を與へる。而して此月經の爲めには不快、倦怠を感ずる女子もあり、苦痛、頭痛、無力等を覺える女子もある。然るに男子はかゝる怪しい現象を知らない。

更に著しいことは、性的關係を異性と結んだ後の結果である。男子は性的關係を結ぶ前後共に同樣、些の變化も生じない。然るに女子は姙娠して多くの場合に)以後九ヶ月の厄介な月日を迎へなければならぬ。九ヶ月滿ちて分娩の大役を果し、更に終つて授乳、哺育の義務を盡さなければならぬ。女子に課せられた其刑罰は、餘りに酷であるとも思はれる。然し兎に角女子は性の奴隸である。自然は、男子以上の重荷をこれに課したのである。

以上を簡單に言ふと、性的無智の爲めに過失の生じた結果は、少年よりも少女に悲慘であること、性的本能及び其肉體的精神的現象は、男子よりも女子に重大であること、此二つの事實があるから、性的教育は男子の場合よりも女子の場合に必要であると考へる。但し男子の性的教育が不必要であ

ると言ふのではない。女子の方が更に一層必要であると言ふのである。此點は特に誤解のないやうにして貰ひたい。

第二章　女子生殖器の解剖

兩性を區別する第一の器管は、生殖器である。分娩、出生、卽ち種族が繁殖し永續するは單に此生殖器の爲めである。從つて生殖器を又繁殖器と呼ぶこともある。

生殖器に就いて先づ學ぶべきことは、其構造と位置、卽ち其解剖である。生殖器は內外の二部に分類される。內生殖器は最も重要な器管、卵巢、喇叭管、子宮、膣等から成る。外生殖器は、隱門、陰核、處女膜等である。

（イ）內生殖器

卵巢。卵巢は女子生殖器中、最も緊要なもの、卽ち卵子を生ずる機能を持つてゐる。卵子は一箇の細胞で、男子の精子と出會へば發生して胎兒となる。若し女子に卵巢を缺けば、恰も男子に精巢を缺くと同樣、(元來卵巢は精巢に相當する。それ故男子に精巢を授けて女性化すると同じく、女子に卵

巣を授けて男性化する)決して子供を得ることが出來ない、やがて人類は地球上から滅亡する。

卵巣は一對、廣い靱帶を以て子宮に連絡する。灰白色を帶びた淡紅色を呈し、長さ一吋半、廣さ四分の三吋、厚さ三分の一吋、重量は八分の一オンスから四分の一オンス位。表面は、凹凸多く襞皺があつて、一見形狀は扁桃に似て居る。

喇叭管。喇叭管は有名な解剖學者ファロピウスの發見に係り一名ファロピアン管と言ふ。又輸卵管と呼ぶこともある。其機能として、卵子を卵巣から子宮に輸送するからである。一對の細長い管で、卵巣から子宮に延びて居る。而して卵巣に接した部分は廣く喇叭狀を呈して居る。

喇叭管の內面の粘膜に炎症を起せば、女子の不姙症の原因となる。卵子の子宮に行くに障害を來すからである。

子宮。子宮は卵子を胎兒に成長發達せしめる器管である。梨狀の筋肉質の器管、周圍は厚い壁となり、姙娠の膨脹發達にも充分堪へられる。其幅

の廣い部分を子宮體と言ひ、下方の狹い部分を子宮頭と言ふ。成熟した女子の子宮は、長さ三吋位、幅二吋位、厚さ一吋位。重量は一オンスから一オンス半位である。姙娠狀態になれば、非常に膨脹するが、其詳細は後章に說く。

子宮の形狀は殆んど三角形をなし、上方の二角が喇叭管に通ずる。子宮頭の中央に位置する外孔は、所謂子宮口である。

子宮は、膀胱と直腸との中間にある骨盤の中央にある。而して靱帶を以て支へられる。此靱帶は、一般に脆弱の爲め、烈しい肉體的勞働其他の障害に會つて、伸張して仕舞ふことがある。其時子宮は脫落して膣內に降下する。或は位置を前轉する。其他、子宮が前方に屈した場合、或は後方に屈した場合は不姙症の原因となる、卽ち子宮の位置が常態でない時、男子の精子は子宮口に達するに困難であるからに外ならぬ。子宮の內粘膜は特殊の機能を持つて、月經に重大な關係を及ぼす。

膣。膣は子宮と體外とを連絡する通路、外生殖器なる陰門から子宮頭に及んで居る。強靱の纖維狀筋肉質よりなり、粘膜を以て包まれて居る。然

し平滑ではなく、數多の襞壁がある。從つて、それが必要な場合、例へば姙娠の場合には、伸張して通路を廣くし、分娩を容易にする。膣の長さは三吋乃至五吋、但し一般に分娩の經驗ある女子の膣は、無經驗の女子のそれよりも廣大である。

處女膜。處女に於ては、膣の外口が、處女膜と稱する粘膜を以て蔽はれる。處女膜は形狀も一定せず堅硬の度も種々である。非常に薄くて容易に破裂するものもあり、時には交接の際も破裂しないものがある。多くの場合、上方に一孔を存して、膣の分泌液、子宮の出血等を通過させるが、異例として、全然膣口を閉塞した儘、一點の小孔をも存しないものがある。少女に最初の月經が來潮した時、さうした場合、出血は體外に流出することが出來ないで、膣内に堆積する。これは直ちに醫師の手を以て破らなければならぬ。

其反對に、時として處女膜を全然缺如する者がある。又、餘りに硬靱の爲め交接後にも破裂しないものがある。それ故に、通常は處女膜の有無に依つて（處女膜は殆んど最初の交接の爲め破裂するもの）處女か否かの證據と

認めて居たが、必ずしも眞理とは言へない。即ち先天的に處女膜を持たない女子もあり、後天的に種々の障害（手淫、墮落、疾病等の）を受けて處女膜を破る女子もある。

（ロ）外生殖器

女子の外生殖器は、大陰唇、小陰唇、陰阜、陰核等から成る。大陰唇は陰阜の下部にあつて、成熟した女子にあつては毛を生ずる大なる襞積である。小陰唇は大陰唇の内部に存する小襞積である。

陰阜は陰毛を生ずる場所、外生殖器の最上部に位し（即ち、下腹と生殖器と相接するところ）脂肪質の厚層を以て隆起する。形狀は三角形に近い。

陰核は陰唇の下層、小陰阜の上部に存する小體、一部又は全部を小陰唇に蔽はれる。

尿道は陰核と膣口との中間に開き、尿の通路となる。女子の中には尿が膣を通ずると誤解する者もあるが、勿論これは誤謬、膣は尿と關係しないの

である(男子の生殖器に於ては、排尿と射精とが同一通路。此點が相違する。)

乳房。直接生殖器ではないが、乳房は繁殖の補助器管である。男子にあつては不用器官たるに過ぎない乳房が、女子にあつては發達して重要な役目をする。乳を生じて嬰兒の榮養を計ると同時に、女子の外形に美觀を添へて魅力あるものとする。哺乳の時、子供の口をつける突出部を乳頭と言ひ、乳頭の周圍の暗色の部分を乳頭輪と呼ぶ。

骨盤。內生殖器のある下腹部は骨盤である。これは三箇の强硬な骨を以て成る。薦骨(これは五箇の推骨を融合して居る。)と二箇(一對)の臀骨とである。臀骨は腸骨、坐骨、耻骨の三部を以て成り、股に關繫する。

男女の骨盤には著しい差異がある。女子の骨盤は淺く廣い。骨の周圍が廣く延びた爲め、外見上臀部が發達して居る。薦骨は短くして曲らない。而して凡べての點で子供の出生に好都合となつて居る。

第三章　女子生殖器の生理

器官の重要なことは、其機能の重要なことである。勿論、形狀、構造、位置などを學ぶことは必要であるが、更に、其機能を學ぶことは一層必要である。此意味に於て、生殖器の解剖よりも、其生理に就かなければならぬ。

卵巢の機能。女子の卵巢は男子の精巢に相當して、最も根本的器官である。卵巢が、若し缺如すれば、她の生殖器官全部が、其機能を行ふも無益である。卵巢の著しい機能の三つは、卵子を生ずることゝ、一種特異の分泌液を生ずることゝである。前者、卽ち卵子を生ずる機能がなくば、種族の永續は望めないから、これを種族的機能と呼ぶ。これに對して後者、卽ち一種特異の分泌液は、女子の血液に吸收されて、其特異の肉體乃至精神に影響するから、これを個人的機能と言ふ。恰も男子の場合に、精巢が精液を生ずる以外に、一種の分泌液を生じて、男子の特徵を現はすと同樣である。月經の來潮

する時代から、閉經期の來るまで、女子は一生を通じて此分泌に支配される。單に肉體的發達に影響するのみでなく、精神的方面にも微妙な影響を及ぼす。

先づ第一に、これは女子獨特の特徴（第二義的性的特徴）を創る。若し卵巣の内分泌が無いと假定すれば、女子は多少の差こそあれ、男子に似て來る。白味を帶びた美しい肌、艶々しい長い髪、乳房、廣い骨盤、高い聲、其他は恐らく失はれるであらう。第二に此内分泌は他の生殖器官の特殊な發達に必要である。若し卵巣を除去すれば、子宮、膣は勿論、外生殖器までが萎縮する。第三に、女子の性慾を衝動して異性との關係を享樂させるは、此内分泌の作用である。從つて卵巣を除去、殊に青春期以前に除去すれば、生涯、性慾を生じないと共に快感をも感じない。第四に、これは女子の健康、精力、敏活等を助ける。

卵子の數。嬰兒の出生當時は、其卵巣には實に夥しい卵子を包含する。又事實妙齢期に達した時よりも、數に於て多いのである。それは約十萬と

稱せられるが、妙齢期に至つて三萬位に減少する。月經初潮期から終經期までの間、卵子の成長するは毎月一箇だけである（それ故、一年中に約三百乃至四百の卵子が必要な丈けである）。從つて種族繁殖の爲めには、極めて少數の卵子で足りる筈である。數萬を以て稱する卵子は不必要な過剰ではないかと思はれる。然し自然は、種の保存の爲めには常に浪費する。例へば卵巣の一部が障害を起した場合、少なくとも數千の卵子の死滅を免れないであらう。其場合にも狼狽しないやう自然は常に多くの卵子を貯藏する。此自然の過剰は、男子の場合、殊に著しい。卵子を受胎させる爲めには、僅一箇の精子あれば足りる。然るに一度の射精中に含まれる精子の數は、常態にあつて數十萬と稱される。數千萬の中の一箇丈けが卵子に適合して、其他は悉く浪費される。

グラフヒー氏腺胞。各卵子は凡べて小胞に包まれて居る。此小胞が所謂グラフヒー氏腺胞（千六百七十二年、同名の醫師の發見、以後から呼ぶ）で、數は卵子の數と一致する。

妙齡期(月經來潮と同時)以前に於ては、グラフヒー氏腺胞は、成熟しない卵子を含んでは居るが、事實は殆んど無活動の狀態である。然し月經の開始と同時に、卵巢内の大活動を始めて、毎月一回規則正しく循環する。グラフヒー氏腺胞が成熟破裂して卵子を排出する、と同時に月經作用が起る。此二つの作用は常に密接して居るが、因果關係は無い。月經は、子宮内面の精液と血液とを混合して排出する毎月の現象である。これに就いては、後章に於て特に詳細に說明する。妙齡期から終經期に至る間の女子は、凡べて(變態は例外として)廿八日毎に、グラフヒー氏腺胞が成熟破裂して、卵巢から卵子を排出する。其破裂する前、卽ち成熟し切つた時、膨脹して卵巢の表面に突出する。一面に充血して居るが、唯一點、卵巢表面に突出した部分が蒼色を呈して稀薄である。破裂は、必ず此一點から始まる。

喇叭管の機能。喇叭管の機能は、卵子をば卵巢から(これは勿論グラフヒー氏腺胞の成熟破裂した卵子)子宮に輸送する。卵子が精子と會つて受胎

するは、多くの場合、子宮の入口に近い喇叭管内のことである。而して一旦受胎した卵子は、徐々に子宮に下り、其處に安定の位置を占めて、約九ヶ月を其成長に費す。

子宮。子宮は受胎の時から分娩の時までの胎兒の家である。

厚い壁に包まれた暖い子宮内で、子供は次第に成長發達して來る、食を採り呼吸をし、遂に其器官と機能とが完成の狀態になつて出生する。これが子宮の唯一の機能、否、少なくも有用な唯一の機能である。と言ふは、子宮が他に一つの機能、無用な機能たる月經を持つて居るからである。勿論、月經が、廿八日毎に循環することは女子にとつて常態である。然し常態は必ずしも必要でなく有用でない。月經現象の爲めに、幾多の婦人は苦悶して遂に生命を失ふ原因となることもある。

膣の機能。膣は言ふまでもなく、交接の行はれる場所で、男子の陰莖を受け、精子の一時的貯藏所となる。然し一旦精子が子宮に達すれば、再び生殖の爲めには必要がない。交接の爲めにのみ必要な器官である。

第二義的性的特徴。生殖器は第一義的の性的特徴を示して、一見、男女兩性を區別する。然し他に幾多の性的特徴或は性的差異がある。これは性を區別するに重大な意義はないが、相互に異性を注視させる焦點となる。例へば髯は男子の特徴であつて、所謂第二義的性的特徴である。これは極めて多い。體内にある千億以上の各細胞が悉く、其屬する性を映して居るとも言へるだらう。

先づ第一、骨骼である。女子は男子よりも一般に小さく細い。骨盤は既に説明した通り淺く廣い。筋肉は小さく圓い。全體の輪廓が、男子の角立つて居るに反し、圓味を帶び曲線に富む。皮膚は纖弱、優美、柔軟である。頭髪は長く美しいが、他の部分の毛は極めて薄い。音聲は快活、輕快、而して所謂ソプラノである。乳房は異常に發達し(男子の乳房との對照を見よ)重要な目的を果す。呼吸にも特徴がある。男子が胸の低部でするに對して女子は上部でする。頭腦は小さく、其回旋は單純である。

男女兩性の區別は、以上の肉體的特徴に依る以外、精神的特徴乃至感情的

特徴にも著しく現はれて居る。然しこれは問題外であるから細叙しない。唯一點、男女兩性の何れが優れて居るかと言ふ議論は、要するに愚論であるといふことだけを注意して置きたい。或點で男子は女子に優る、然し他の或點で劣る。凡べて兩性は公平に平均されて創られた者、而かも其性は永久に同一にはならない、それ故、相互に優劣を論ずる權利はない。兩性の差異は明瞭であるが、其差異が相互に兩性を補助して居る。一種の保守家乃至婦人憎厭者の「女子は男子以下の動物に過ぎない」といふ要求は、恰も極端な婦人讃美者の「女子こそ優越した者である」といふ要求と同樣、極めて皮相な愚論である。

第四章　性慾本能

自然界の凡べて、最低の動物から最高の人間に至るまでの凡べてが持つて居る性慾本能は、先天的のものである。異性を憧憬すること、女子が男子を、男子が女子を戀すること、此慾望は吾々の生れた瞬間から現はれる。何人も持つて居なければならない本能である。それ故、恥づることもなく、不面目なこともなく、罪なことでもない。種々の理由から自然に與へられた正しい、自然の、健全な慾望であり、一方、種族の保存、繁殖の爲めに缺くべからざるものである。若し其處に恥づることがありとすれば、性慾本能を持つて居ることでなく、寧ろそれを缺いて居ることであらう。何故ならば、此本能が無いとすれば人類は早晩滅亡しなければならぬからである。

「思想乃至感情には責任がない」――此言葉を忘れてはならない。所謂因襲的道德に因はれた多くの男女の中には、異性に戀したり觸れたり(或は接吻したい、抱擁したり)する慾望の湧き上る時、ひそかに罪惡を犯して居るの

ではないかと杞憂して、其結果、憂鬱症にかゝる者がある。成熟期に近い少女にしてかくした狀態にある者は、先づ「思想乃至感情には責任がない」といふ言葉を知るがいゝ。事實、何々したいといふ思想や感情に罪はない。勿論行爲に現はして實行することは別問題である。其理由は、元來吾々は、吾吾の思想なり感情なりに對して責任を帶びて居ない者であるからである。それは吾々の制御することの出來ないもの、但し、さうした慾望が生じた時、其慾望のまゝに放縱になれといふ意味ではない、勿論吾々は、それに對して戰ひ、驅逐しようと努力しなければならぬ。然し決して恥づる必要はない、先天的に具有して、其起原に關しては、吾々が責任を持たないからである。

然し、實行には責任がある。行爲は、少なくもある程度まで統律することが出來る。從つて惡い行爲は罪惡であり、道德上の責任である。單に性的行爲に對する慾望は、飢渴に迫つた時の、食物に對する慾望と同樣、些の罪惡でもない。然し、其慾望を實行することは、(但しある狀態にあつて)飢ゑた者が、同程度に貧しい者のパンを盜んで、其慾望を充たすことゝ同樣、罪惡であ

る。

かく言ふは、諸君に說教する積りではない。私は極端論者でもなく僞善者でもない。禁慾主義と放縱主義、共に私は採らない。これは何れも同等に惡い。私が此處で說かうとすることは、出來るだけ正しい性的知識の全部を反覆して、これを普及させたいことである。

性的行爲と性的道德とに對する各種の意見なり說明なりが邪路に走つて、而かも誤謬に充ちて居ると假定する。これは實に讀者の或者を悲慘な苦痛に導くものである。男女共に苦しむが、種々の理由の爲め、女子が遙かに多くを苦しまなければならぬ。自然的の障害(月經、分娩、哺乳等)の爲め、長年月の抑制の爲め、自ら求めず求められるを待たねばならぬ事情の爲め、經濟的には男子に從屬すべき運命の爲め、女子は常に多くを拂はなければならぬ。

以上の理由がある爲め、女子の性的教育は、二重に必要である。此點に就いては、既に第一章に特に力說して置いた。然し女子の先天的障害、月經、娠、分娩、哺乳のことなどは吾々の義務を更に增す。卽ち、女子が重荷を負つて居るから、常に男子よりも多くを拂つて居るから、少なくも、それに對して吾々は、親切と義俠とを以て、特別に考慮を費してやらなければならぬ。

第五章　春機發動期

春機發動期は、少女の一生に取つて、實に驚るべき意義ある時機である。勿論、少年に取つても、其生涯の發達に重大な意義を持つては居るが、少女の場合に於て、それは特に著しい。

此時機の如何に依つて、少女の將來は、幸福にもなり、不幸にもなる。

春機發動期といふ言葉は、成熟を意味する。少年なり少女なりが、性的に成熟した時機の稱である。換言すれば、春機發動期に至つて、初めて少年の生殖器に、精子が生ずる、少女の生殖器に、卵子が成熟し排出される。殊に少女の春機發動期は、少年の場合に見られない獨特の現象を伴つて、鮮やかに知ることが出來る。卽ち、それは月經の現象である。

肉體的變化。此春機發動期といふ言集(puberty)は、ラテン語の"puber"といふ成熟を意味する言葉から出た。其"puber"といふ言葉は、同じくラテン語の"pubes"といふ生毛を意味する言葉から出た。此成熟の時代に達して、あ

らゆる哺乳動物(乳房を持つて子供に授乳する動物)は、毛が發達して來る。吾々人間も、手掌と足底とを除いて、無數の毛孔を以て全身を蔽はれて居る。生れた瞬間から、生毛に包まれて居る。それは殆んど肉眼を以ては見ることの出來ない程微小な毛に過ぎないが、擴大鏡を以て見れば、容易に見ることが出來る。それが成熟期に達すると同時に、色に於て濃厚となり、數に於て增加する、從來氣付かなかつた場所にも、無數の毛を生ずる。上唇、顏面、(少年の場合)腋下、下腹部など、殊に著しいのである。

それ故少女に於ける春機發動期の最初の特徵は、先づ徐々に腋下に毛を生じ、次に陰阜、大陰唇に毛を生ずることである。生殖器の凡べて、陰門、膣、子宮、卵巢等が發達して來る。從來、單に內分泌のみを生じて居た卵巢が、此時代になつて卵子を排出する。換言すれば、每月一定の排卵作用が起る。其排卵作用と時を同じうして、每月の月經作用が起る。乳房は大きくなり、其輪廓は特色を帶び、腺質の物質を中心に含み、必要な時には、乳を分泌する能力を具へて來る。更に、此時代に入つて不思議に感受性が强くなり、僅かの

刺戟にも苦痛を訴へる。

單に生殖器のみではない。全身がそれ々々發達する。身長は急激に增加し、四肢に非常な變化を起す。骨盤は廣くなり、胸廓も廣く厚くなる。骨骼も太く圓味を帶びて、漸次、少女期を脫した女らしさとなる。

精神的變化。肉體的變化のみではなく同時に精神的方面の著しい特徵が起る。先づ情緒が發達する。常に情緒が溢れて、何事にも感じ易くなる。異性に對して自意識が强くなる。勿論、未だ性慾の衝動が、明確な形をとつて現はれては來ないが、(少年の場合は現はれるが)然し漠とした憧憬に充たされる。少女同士の友達に强い熱情を捧げることのあるのも、此時機の特徵である。而してこれは決して責むべきことではない、恰も安全瓣のやうなものである。邪路に走つて變態に發達することは、殆んど絕無と言つてもいゝ。

此時機は同時に憧憬と空想との時機である。狂烈な戀物語を好んで讀み、其女主人公の身の上に、自分を比較一致させて喜ぶ。それ故、此春機發動

期の讀物如何に依つて、少女の精神的變化に相違がある。それ程、讀書の及ぼす影響は著しいものであるから、周圍の年長者は、よく注意して、何を讀んで居るか、何を讀ますべきか、仔細に研究しなければならぬ。身心の固まり掛けようとする時の教育が、何よりも大切である。

所謂、神經質の少女、特に家庭内に神經的雰圍氣のある少女は、特別に注意する必要がある。何故ならば、神經病的特質の生じて强くなるのは、此時機に多いからである。又、性的惡習慣(手淫)に耽るのも、此時機である。從つて其親に思慮あれば、春機發動期の少女に對しては、特殊な注意を加へ、出來るだけ、肉體的と情緒的との激動を少なくしなければならぬ。

少女の春機發動期に至る年齡と、月經初期との年齡とが、同時であると多くの學者に認められて居る。我國(合衆國)では、月經初潮の平均年齡は、十三歲、或は十四歲である。月經前の、徐々に發達しつゝある年を、春機發動前期と言ひ、月經後の第一年を、春機發動後期と呼ぶ學者もある。而して春機發動期に入つた時から、性的に完全した成熟を遂げた時までを、妙齡期と言ふ。

これは通常十三歳から十八歳までの間の樣で、而して男女共に十八歳になれば完全に成熟する。精神的には、吾々は一生涯常に何事かを得て發達の中止することはない、又、肉體的にも十八歳以後に於て、尙ほ成長するものであるが、然し性的には、男女共に十八歳で完全となる。但し種々の理由で廿歳又は廿五歳位まで、母親となることを待つがいゝ。

第六章　月經

女子をして先づ性の生物であるとの意識を持たせ、男子とは相違したものであるとの意識を持たせる第一の機能は、月經である。

月經とは月毎に起る血液の排出である。月經といふ言葉 "mentstruation" はラテン語の "mensis" といふ月を意味する言葉から出た。俗語では「月のもの」「めぐり」など種々の言葉がある。「何かを見ない」――通常月經のないといふ意味を現はすにかう言ふ。

月經は、常態にあつて、規則正しく一ヶ月に一度宛ある。然し陽曆の一ヶ月でなく、陰曆の一ヶ月、卽ち廿八日間に一度ある譯である。それ故一ヶ年に十二回でなく十三回である。

月經の血液は何處から來るか。此の血液は子宮內部から溢れるもので、毎月、月經前數日になつて、子宮內粘膜が充血し、血管が血液過多の爲め膨脹する。若し女子が異性に觸れて姙娠すれば、此過多の血液は胎兒の養育と

發達との爲めに必要となる。然し、姙娠しなければ、過多の血液は、血管から溢れ(ある血管は破裂する)子宮から膣に流れて、體外に排出される。布巾又は綿類を以て拭ふのである。

月經は何歳から起るか。我國(卽ち合衆國)では、月經來潮の平均は、十三歳乃至十四歳であるが、往々にして早く十二歳の者もあり、遲く十五六歳、甚だしきは十七歳の者もある。十二歳以前、又は十六歳以後の初潮は稀な例外と言へる。然し、氣候寒冷の地方、北方の諸國にあつては、十八歳位で月經を見る者も稀有ではない。反對に溫暖の地方、南方の諸國にあつては、早くも十歳前後の者もある。氣候と國土との異るにつれて、月經も異るものである。著者は、多くのフィンランド人に、患者として接したが、其少女達は、合衆國に移住した最初の數ケ月間、或は最初の一年間、月經の閉止を見たと言つて居る。

月經は何歳まで續くか。月經の閉塞する時期は、普通四十八歳乃至五十歳である。然し、或場合には五十二歳、或場合には四十四五歳のこともある。

これを平均すれば、女子の姙娠能力のある月經時代は約卅五年間、而して制限も加へず、豫防も用ゐなければ、生涯を通じて、廿人乃至卅人の子供は持ち得る筈のものである。

月經は何日間續くか。一度の月經日數には、大抵三日間乃至五日間である。時には二日間しか見ないこともあり、時には七日間を數へることもある。然し、必ず、最初の二日間に、排出すべき血液の大部分を排出する。

血液の量。月經中に排出する血液の總量を正確に計算するのは困難である。然し、大抵一オンスから三オンスまでゞある。或者にあつては、四オンス、異例としては八オンスのこともある。若し多量の時は、變態にあるものと認めて、醫師の診察を乞ふがいゝ。

第七章　月經異狀

女子にとつて月經の現象は、完全な狀態の生理的作用に過ぎないから、其爲めに苦痛を感ずることは無い筈である。辛痛、頭痛、刺戟をも受けず來潮する瞬間まで氣付かず、漸く血液の滴るやうになつて、初めて氣付く筈である。然るに不幸にして、かうした常態の女子は、極めて少數であると言つていゝ。大多數の女子は、大抵不快な徴候を伴ふ者である。ある者は、一兩日間の頭痛を覺え、ある者は氣が滅入り、ある者は苛立ち、ある者は絶望し、氣六ケ敷しくなり、ある者は食慾もなく、希望もなく、何をする氣力もない。ある者は一兩日位臥床して藥劑に依らなければならない程、甚だしい苦痛を覺える。

月經の血液が多量に過ぎて、月經よりも寧ろ出血に類することがある。これを月經過多又は子宮出血といふ。反對に殆んど氣付かない程の月經しか見えないことがある。これを月經不調といふ。又、稀有の例ではあるが、月經が子宮から流出しないで、他の部分、例へば鼻などから流出することもある。或婦人は、毎月定つて鼻からの出血を見た、時には乳房から出血する者もある。然しかうした變態は、特に珍奇な異例とすべきものである。

月經困難。月經時に苦痛を伴ふ者のあることは既に述べた。これは卽ち月經困難で、男子の絶對に知らない、女子のみの運命である。勿論、多少の苦痛、少なくも不快の感情を伴ふことは、月經の常態であるから、此處に言ふ月經困難には含まれない。然し多くの場合、苦痛が烈しく仕事の能力を失ひ、一日なり二日なり臥床しなければならぬ。更に烈しくなつて、止むを得ずモルヒネを使用しなければならぬこともある。然し、モルヒネを三四週間毎に使用することは、其結果實に危險と言ふべきであるから、かうした狀態にある女子は、一刻も早く、其困難の原因を發見して、適當な治療を施さなければならぬ。凡べての場合、或は多くの場合、月經困難が單に局部的疾病であると考へることは誤謬である。單に卵巢、單に子宮の障害に過ぎないと、容易に考へる者がある。然し多くの月經困難は、神經的原因を持つて居

る。神經の中樞に原因があつて、生殖器其ものには、些の異狀さへもないことがある。それ故、局部的治療の方法を採ることは間違つて居る。但し熟練した專門醫の診斷した結果、局部的の手當で充分であると認められた時は、別問題である。

第八章　月經時の衞生

月經時の衞生は要するに二語に盡される。清潔と休息とである。それは常識を以て考へても容易に領けることである。而して後者は、休息に就いては特に多くを言ふ必要がない、大抵の者は、身體の不快の時、休息するからである。殊に月經困難の場合は、休息を採らなければ益〻症狀が險惡になり、流血の量は益〻增加するから、止むを得ず休息する。然るに前者、清潔に就いては同樣には言へない。これには確かに月經に關する古代からの因襲的迷信說が、今尙ほ信ぜられて居る爲めである。女子は、月經中、入浴洗滌を恐れる。而かも若し女子に洗滌を加ふ必要ありとすれば、それは勿論、月經中である筈である。女子の惱む白帶下は、殊に月經中に增すものである、而して多くの女子の月經は、特臭を持つて居るものである。而かもそれを四五日間も放擲して入浴洗滌しないとすれば、血液の幾分かは腐敗して、特に忌ましい臭氣を放つやうになる。相當の距離にある者でさへも氣付く程

である。又膣を全然洗滌しない女子がある。そんなことは餘計なことであると考へる女子さへもある。或種の清淨教徒的な女子の中には、それを天理に背く方法であると考へ、(洗滌は天理に最も近いものといふことを知らないで)單に放逸な、如何はしい女だけのする事だと考へる者がある。然し若しこれ等の女子が、彼女等の爲めに善いこと、同時に健康に善いことが何であるかを知つたならば、少なくも月經中は(月經時以外は兎も角として)洗滌を怠らなかつたであらう。

清潔。少女が十二三歳に達したならば、母親は第一に月經の現象を説明し、次に早晩現はれるだらうと言ひ聞かせる。月經は恥づべきものではないこと、現はれたならば直ぐに母親に告げること、其時、母親は詳しく其處置を教へるからといふこと等を語り、脱脂綿又は消毒濟の布巾の使用法をも示す。蹠褻は、特別に消毒して仕舞つてある物以外は、使用してはならぬ。

不潔な蹠褻は、往々にして疾病を醸す。白帶下に惱む女子の中には、嘗て往々蹠褻を月經時に使用した者が多い。――れこは私の信ずる處である。

毎朝毎晩、少女は其外生殖器を溫湯又は淡水と石鹼とを以て洗ふがいゝ。既婚の女子は、これも一日に一回洗滌する。洗滌液は、清水二クォート(一クォートは日本の六合強――譯者註)に茶匙一杯の食鹽を混入するか、又は同じく茶匙一杯の硼砂或は硼酸を混入する。昇汞、炭酸、乳酸、沃度チンキ等の藥劑は、唯だ、白帶下が現はれ且つ醫師の指圖に從つて後、使用すべきものである。入浴は極めていゝが、微溫湯にするが安全である。冷水を浴びることは、海乃至河に水泳することゝ共に、月經時の禁物、少なくも最初の二日間は絶對禁物である。但しこれはあらゆる場合に適用されるとは言はない。私の知人にも月經中海中に入つて水泳する女子があつたが、一度も其爲めに有害な結果を生じたことはなかつた。然しこれは例外と見るべき者で、かうした書物では、中庸の人々だけの眞理を述べる。而して如何なる場合でも、安全な策を採るに越したことはない筈である。

休息。休息も、月經時に於ては清潔と同樣(清潔以上ではないが)重大なことである。上述擧げた女子は、月經中も平生と何等の異狀もないと言つて

居た。それ故、何等特別な衛生法としてはない。然しこれは極めて少數で、大多數の女子は、多少の相違こそあれ、皆異狀を伴ふものである。從つて月經中は、成るべく過度の勞働を避け、殊に最初の二日間を安靜に送る必要がある。生來虛弱な女子が、自宅にあつては臥床しながら、職業の爲めに止むなく外出し、終日を徒步したりするは、實に亂暴と言はなければならぬ。

月經時の子宮は平生よりも膨脹し充血して居る。其爲めに注意しないと將來の疾病、所謂「婦人病」の基となる。職業婦人に向つて、其仕事を全然放擲せよとは言はないが、しかし過度でなく出來るだけ休息を多くする。非常に虛弱且つ感じ易い少女は、最初の二日間だけを休校(女學生であるとして)するがいゝと思ふ。例外もあるから一概には言へないが、平均して、舞踏、自轉車乘り、乘馬、競爭、其他體育競技式の運動の一切を、月經中だけ休止したい。自動車、馬車等に依る旅行も、ある場合には有害である。月經過多に陷る危險がある。

第九章　受胎

受胎とは男女兩胚種が結合する經路、卽ち男子の精子と、女子の卵子とが結合する經過を言ふ。結合が滿足に終れば、新しい生物が其處から生ずる。これは人類を初め動物界凡べてゞある。

經過。受胎の經過を簡單に言へば、先づ、卵子が成熟して、卵巢內のグラフヒー氏腺胞から排出する、それが喇叭管の端に捕留されて、管內の氈毛の波狀運動に動かされ、漸次子宮の方面に向つて進行する。

此時勿論交接しなければ何事も起らない。卵子は、死滅するか、喇叭管又は子宮內に幾分か殘つて、月經に混つたり排出物に混つたりして、體外に出る。然し交接が行はれたとすれば、男子の精子の數千數萬が子宮內に侵入して、卵子に出會はうとする。既に述べた通り、精子はそれ自身獨立した活動力を具へて居る、而かも其活動の速力は極めて早い。精子の長さ僅々一吋の三百分の一に過ぎないことを考へ合せたならば、其速力の七分間に一

吋といふ事實は、極めて早いと言つてよからう。

精子の中にも弱い者と強いものとがある。而して其弱い精子は、途中で悉く死滅し、僅かに數箇だけが健全に活動を續けて、子宮を通過し喇叭管に達する。其時、偶然に卵子の傍に接する機會があれば、丁度磁石に吸はれる鐵片の樣に、急速に活動を增して、其卵子に突進する。其結果唯だ一つの精子だけ(最も强い精子か、最も卵子に近い精子か)が、頭部を以て卵子を貫穿し、內部に侵入して仕舞ふ。而かも、それと同時に(精子が卵子の內部に貫入すると同時に)精子の侵入した小孔は直ちに閉塞し、他の精子の侵入を許さない。——そこに凝結作用が起る譯である。若し誤つて二箇以上の精子が一個の卵子中に貫入すれば、其結果、畸形を生じ易い、それを防ぐためである。

卵子に貫入する一箇の精子を除き、其他の精子は凡べて死滅して仕舞ふ。唯だ一箇だけが必要である。而して受胎した胚種は俄かに新しい活動を開始する。先づ第一に占むべき一定の位置を求める。——若し卵子が精子に會つて貫入された場所が子宮內である時は、胚種は其ま、其處に止る。

子宮內部に密着して成長發達し、九ヶ月後の完全な成熟を待つて外界に生れ出るのである。然し卵子と精子とが出會する場所が子宮內でなく、喇叭管內である場合、(多くの場合はこれであるが)受胎した胚種は漸次子宮の方面に低下して、其處に安全な位置を占めるのである。

子宮外姙娠。喇叭管は卵子の成長と發達には都合の悪い場所である。喇叭管は子宮のやうに膨脹することも出來ないし、胚種の榮養を司ることも出來ないからである。それ故、若し受胎した卵子が、其ま、喇叭管內に止つて(子宮內に入らず)成長する場合、これを子宮外姙娠と言ひ、非常に危險なものである。成るべく早く診斷して手術を加へなければ、遂に其喇叭管の破裂を招く。

精子が卵子に貫入すると同時に、細胞の分裂が始まる。唯だ一箇の細胞である卵子が、先づ二箇となる。二箇が四個となり、四箇が八箇、八箇が十六箇、十六箇が卅二箇、卅二箇が六十四箇、それから百廿八、二百五十六、五百十二、千〇二四箇となり、遂に無數の細胞となる。而してこれは桑實に似て、內外

中の三胚層から成り、其處から將來の胎兒たるべき各種の器管が生ずる。

二箇の卵子が同時に二箇の精子に貫入されて受胎した場合、結果は所謂雙兒である。

第十章　姙娠

卵子が受胎した瞬間から、女子は姙婦と呼ばれる。受胎から分娩までの姙娠期間は、各動物に依つて著しく相違する。例へば兎は一ヶ月、犬は二ヶ月、羊は五ヶ月、牛は九ヶ月、馬は十一ヶ月等であるが、人類は凡べて九ヶ月(陽暦)即ち陰暦の十ヶ月、日數にして二百七十四日乃至二百八十日間である。通常最後の月經の終つた第一日から數へて二百八十日に生れるものである。

此簡單な方法は、三月を逆に數へて七日を加へることである。例へば、最後の月經が四月四日であるとする。三月を逆に數へて一月四日となる、それに七日を加へて一月十一日。即ちこれが分娩日である。又、最後の月經が十二月卅日に起るとする。それを三月逆に數へて九月卅日。それに七日を加へて十月の六日、これが分娩日である。二月等の日數の短い月も、普通に計算していゝ。此計算か絶對に正確なものではなく、大體の標準を示

すだけのものだからである。

胎兒が母親の胎內で微動することを胎動と言ひ、通常は姙娠の中間、十六週間乃至十八週間の後に感じ始める。

姙娠は勿論、生理上常態の現象である。然し生理上の活動は凡べて障害を伴ひ易いものである。而して動物體に起る現象の內、姙娠の過程位、大きな活動と大きな變化とを起すものはない。それを知る爲めには先づ九ヶ月に起る子宮だけの變化を見るがいゝ。最初小さな梨狀に過ぎなかつた子宮が、次第に大人の頭位になる、而してそれは年々膨脹するだけではない、實際に大きさが增して、數度姙娠した女子の下宮筋肉壁は、姙娠したことのない女子のそれより、遙かに厚いのである。胎兒は其子宮筋肉壁の强い收縮に依つて押し出される。決して胎兒自身の力で子宮を出るのではない。それ故、若し子宮が其押し出す作用をしない場合、壁が薄かつたり弱かつたりする場合、共に分娩困難となつて、時には器械を用ゐなければならなくなる。更に子宮の變化以上に胎兒の變化がある。最初受胎の際、ピンの頭部」

程にもなかつたものが、分娩の際には九ポンド乃至十ポンドの重さとなる。一箇の元形質、一箇の細胞に過ぎなかつたものが、數萬數億の細胞となり、複雜な器官と組織、腦、神經組織、筋肉組織、結組織、骨骼其他を生ずる。實に微妙不可思議な變化である。

生物學的に言へば寄生體に過ぎない此胎兒が（寄生體と呼ぶことは穩當を缺くかも知れないが）其榮養を母親の血液から採り、其爲めに母親は、二人前の榮養を用意しなければならぬ。單に榮養のみでなく排泄器官、腎臟をも、子供の爲めに提供しなければならぬ。胎兒の排泄をも兼ねるからである。それ故、姙婦殊に生活の爲めに不健全な職業に從事する女子が、多くの場合、姙娠から分娩にかけて障害と困難とを起すことのあるは、怪しむに足りないのである。

第十一章　姙娠の異狀

月經が完全に順調で、些の異狀を伴はない女子もある。姙娠の場合にもこれと同樣、些の異狀を示さないで分娩する女子がある。かうした幸福な女子は、唯だ月經を見ないからと言ふだけの理由で、其姙娠した事を知るより外方法がない。稍、月を重ねても何等の不快を感じないで、平生と同じやうに、仕事をする。愈、分娩といふときになつても、大した苦痛には襲はれないで濟む。――然し事實に於ては、かうした狀態の女子は極めて小數である、殊に現代の制限された不自然な生活の爲めの職業に從事する者にあつては、益、少數となつて來る。原始的民族よりも、文明國の女子の方が遙かに大きな苦痛を嘗めなければならぬことは今更言ふまでもない。但し吾々は將來もさうだとは信じない、恐らく來るべき世には、眞の衞生が少女教育の重要な部門となるに相違ないから、其時女子の姙娠と分娩とは、原始的民族の場合よりも、更に容易となるに相違ない。然し未だ其時は來ない、現代

の若い女子は苦痛の試煉を經なければならない。

惡阻。 姙娠の異狀として最も普通のものである。非常に嘔氣を催して、食べたと同時に吐いて仕舞ふ。受胎後三週間乃至五週間に起り、通常は三四ヶ月の後に終る。時としては受胎後數日に起ることも稀ではない。

惡阻を治癒するに藥劑を用ゐても、多くは無效である。苦痛を免れることが出來たとしても、治療することは出來ない。元來が普通の病氣でないからである。患者は平生よりも朝寢をして、朝食は床上で採ることにするがいゝ、而して食後約卅分間は起きないで安靜にする必要がある。

危險な嘔氣。嘔氣がはげしくなつて、特に危險に陷ることがある。姙婦は如何なる種類の食物をも採らない、採れば忽ち吐いて仕舞ふ。流動體さへも胃に止まらない。吐き續けて遂には疲勞の極に陷る。吐いた物には血さへ混る。此狀態は極めて危險で、往々姙婦の生命を奪ふことがあるから、直ちに專門醫の處置を乞はなければならぬ。

氣まぐれな食慾。姙婦の食慾は極めて氣まぐれである。而かも大抵次

の四種に分れる。

(一) 姙婦は食慾を失ふ。殆んど全部失はないまでも、極めて小量で、而かも非常に努力しなければ採れない。

(二) (一)と反對に食慾が增す。平生と同樣、一日に數回の食事をして平氣である。

(三) 姙婦は特殊な食物を嫌厭する。多くは肉類を厭つて、それを見たり話したりしただけで嘔吐を催す者がある。

(四) 特殊な食物、或は食物でない物を特に好んで食べたがる。酸味を帶びた物一切(梅干などの)を姙婦が好むは人の知る通りである。時には白墨だの砂だのを食ふ者さへもある。(尤も此白墨を食べるに就いては多少の理由がある。姙婦の組織が、餘分の石灰分を要求する、而して白墨中には石灰が含まれるからである。)

「便秘。便秘は姙娠しない女子にあつても寧ろ普通の狀態であるが、姙娠すれば更に甚だしくなる。注意して成るべく便秘しないやうにするは勿

論、若し便秘した際は、最も簡單な穩やかな方法を採る必要がある。唯飲食だけに注意して治すことが出來れば一番結構である。一般に果實、梅、林檎、無花果、其他はいゝ。便秘の原因となるやうな物、乾酪、珈琲等は成るべく禁ずる。飲食の注意だけで不充分の時は、一週間に二三回の割合で灌腸を行ふ。灌腸は八オンス(容量にすれば半パイント「一パイントは日本の三合一勺餘——譯者註」となる)の冷水又は微溫湯を以てし、少なくも十分間位は內部に保留する。水の代りに時には二ドラム乃至四ドラム(一ドラムは約一匁〇三六——譯者註)のグリセリンを使用するもいゝ。グリセリン灌腸の代りにグリセリンを坐藥に用ゐるもいゝ。然し內服緩下劑は凡べて穩和なものを選び、鑛物性の油など、就寢前に茶匙一杯位飲むことにする。但し如何なる內服藥を用ゐるにしても、同じものを長く續けて用ゐるは非常に惡い。若し何時も同じ藥劑又は方法を繰り返せば遂には腸に反應性がなくなつて、從來の一定量では全然效力がなくなる、次第に益〻多量を用ゐなければならなくなる。卽ち、便秘と戰ふ爲めには、常に武器を變へる必要があ

る、例へば第一夜に鑛物性の油を用ゐる、第二夜には普通の灌腸をする、第三夜にはグリセリン灌腸又は坐藥を用ゐる、第四夜は何も用ゐないで置き、第五夜になつて再び其他の方法を用ゐるか、前を反覆するかする。然し常に記憶すべきことは、第一に藥劑に賴らないで治癒するがいゝといふことである。而して又多くの場合、飲食の變化だけで治るものであるが、若しそれで無效ならば、其時、初めて藥劑を用ふべきである。

齒痛。齒痛も屢〻姙婦に見る現象である。それ故、あらゆる意味に於て齒の衞生を守らなければならぬ。

排尿困難。姙婦は屢〻排尿の頻繁と急進とを訴へるものである。ある者は歩行中に於てさへ數分毎に催す。これは、姙娠最初の二三ヶ月に、子宮が單に膨脹するのみでなく、前轉する(卽ち前方に屈して膀胱を壓迫する)からである。從つて、姙婦が横臥する時、膀胱の壓迫は救はれて、尿の頻繁は中止する。此膀胱の壓迫は、最初の二三ヶ月間持續するが、それ以後になれば、漸次擴大した子宮が骨盤に止つて居ないで、股部の凹處に地位を占めて、子宮

前轉は止み、從つて膀胱の壓迫も止む。然るに姙娠の最後の月、卽ち臨月になつて、再び排尿の頻繁を訴へるが、其理由は、子宮の重量に堪へず次第に骨盤内の凹處に沈んで膀胱を壓迫することがあるからである。これを防ぐには適當な腹帶を占めて、子宮を支へ、且つ膀胱の壓迫を防ぐがいゝ。然しあらゆる場合に有效的確な方法は横臥安靜である。語を換へて言へば四肢を用ゐないこと、これが排尿困難の最良手當である。

直腸疾患。子宮が直腸を壓迫する爲め、姙娠中屢〻起る便秘の爲め、直腸の疾患或は痔が起ることがある。これの療法としては先づ原因を知ることを第一とする。適當な腹帶を捲き、便秘を防ぐ。一日に三四回半パイントの量の冷水を以て灌腸するのも有效である。其他局部の塗布用としては、一二の軟膏があるが、醫師の手に委すがいゝ。

外生殖器の痛痒。姙娠中に、外生殖器に痛痒を感ずるは普通のことである。これは、一般に外生殖器が充血し膨脹して居る爲めか、又は俄かに增加した白帶下の影響の爲めかである。然し其痛痒の烈しさに堪へないで爪

を以て搔けば、往々出血して局部に梅毒傳染の原因を作る。妊婦は注意して搔かないやうにしなければならぬ。痛痒を免れるには、簡單な安全な方法がある。熱湯に浸して固く搾つた手拭又はガーゼを、一日に數回、局部に當てて、次のやうな軟膏を塗る。炭酸十グレン、薄荷五グレン、レゾルチン十五グレン、酸化亞鉛一ドラム、白色ワセリン一オンスを混合した軟膏である。若し更に烈しい痛痒を覺える時は、硝酸銀廿五グレンを、一オンスの蒸溜水に溶かした溶液を塗るがいゝ。

血管怒張。妊婦の足の血管が膨脹して苦痛を感ずることがある。これは子宮の壓迫で血液循環を妨害するからである。此狀態は放擲して置けば妊娠中のみならず分娩も、屢、而してある程度まで、持續するものである。それ故、急應の處置を加へなければならぬ。先づ最上の方法は、常に適當な腹帶を締めて、子宮を支へ、骨盤内に落下しないやうにする。然し既に血管膨張後ならば、護謨製の靴下を用ゐるか、或は少なくも彈力ある毛製の繃帶をする。繃帶は、よく慣れた人に委すべきで、餘り緊縮してはいけない。

便秘は血管膨張を甚だしくするものである。腸は常に注意して便秘を起さなくする。然しある場合、特に烈しい場合には、妊婦が數日間臥床して足を上げて居なければ、如何なる方法も效力のないことがある。

何れにしても足の腫脹は直ちに醫師に見せるがいゝ、これは單に子宮の壓迫に依る瑣事の時もあり、腎臟の故障に依ることもあるが、醫師は兎に角原因を調べて適當な方法を指示して呉れるだらう。

妊娠中には以上の外に、往々乳房の周圍、横腹、顏面などに褐色の點が、不規則にぽつ〻々と生ずることがある。これに對しては何等施す方法もないが、放擲して置けば次第に消失して仕舞ふ。二三の點が此處其處に、何時までも殘つて消えないことがあるが、心配する必要のないものである。

第十二章　醫師の必要

妊娠中の異狀障害に就いて前章に說明したことは凡べて(但し危險な嘔氣は例外とする)輕微なものである。勿論それとても苦痛ではあり、時には甚だしい不快を伴ふが、然し妊婦又は胎兒の生命を奪ふやうなことはない。相當に注意さへすれば無事に分娩することが出來る。然るに時として腎臟に影響することがある、幸にして稀ではあるが、然し其時は早速醫師の手を煩はさなければならぬ。事實、妊婦の採るべき最も正しい安全な方法は、妊娠の明白になつた時から醫師に相談し、分娩の時まで其注意を守ることである。妊婦の中には八ヶ月、九ヶ月の臨月になつて初めて醫師に掛る者さへあるが、これは非常に惡い。何故ならば、今少し以前に手當をして容易に治癒する障害も、手遲れになつて仕舞ふこともあるからである。熟練した醫師ならば、妊婦の罹る大抵の病氣は防ぐ筈である。それ故、私は繰り返して言ふ。――妊婦は凡べて妊娠の最初から醫師に相談せよ。少なくも

三四ヶ月以前、如何なることがあつても五ヶ月前には相談しなければならぬ。醫師は毎月妊婦の尿を檢査して、腎臟の異狀を確かめる。胎兒の位置を知り、餘病の併發はないかと調べる。其結果、常に適當な處置を採ることが出來るのである。

これは妊娠の處置に就いての特殊な說明ではない。從つて詳細に亙る事物は强ひて記さない、それは寧ろ專門の醫師の手に屬すべきことである。然し日常の飲食と一般の衞生とは、簡單に說明する必要がある。

凡べてが滿足に進行して居る場合、烈しい嘔氣もなく、腎臟の故障、其他の障害も起らない場合には、平生の通り飲食を續けていゝ。唯一二注意すべきことは、成るべく湯を多く飲むことである。先づ朝一二杯、午後と夜と共に二三杯、一日に六杯から十二杯位は用ゐていゝ。同時に牛乳を多く飲み、果實、野菜の類を多く採る。肉類は一日に一回丈けに止める。

運動は烈しくない程度にするはいゝ。妊婦の中には、妊娠になると同時に全然筋肉を動かしてはならないと考へて居る者がある、而して硝子張り

の箱の中に入つたやうに、一寸も身體を動かさないで分娩の日を待つ。中には其反對に運動ならば何でも好いと朝から晩まで、歩いたり働いたりする者がある。然し極端は何れも惡い。適度の運動、疲れない程度の散歩が最もいゝだらう。

入浴は分娩の日まで續ける。而して最後の二三ヶ月にあつては、成るべく溫湯を選ぶ必要がある。

第十三章　胎兒の成長

男女共に世人は、胎兒の大きさ、其胎内に於ける各月の成長を知りたがるものである。然し絶對に確實なことは答へることが出來ないが、稍〻確實であると信ずる胎兒の成長を此處に述べる。

第一月（陰曆、以下同じ）の終には、胎兒の大きさが榛實位になる、重量は十五グレン。

第二月の終には、小さい鷄卵位の大きさ。内部器官が一部分出來て稍〻人間らしい形となるが、未だ性の區別は認められない。五六週間の後まで他動物の胎兒と外觀上殆んど相違がないと言つていゝ。

第三月の終には、大きい鶯鳥の卵位、二吋乃至三吋半になる。重量は約一オンス。

第四月の終には、六吋乃至七吋の大きさとなり、重量は五オンスとなる。

第五月の終には、七吋乃至十一吋の大きさとなり、重量は八オンス乃至十

オンスになる。

第六月の終には、十一吋乃至十三吋の大きさとなり、重量は一ポンド乃至二ポンドとなる。若し生れたなら、數分間は生きて居る。

第七月の終には、十三吋から十五吋、時には十六吋、重量は三ポンド。若し生れても育てることが出來る。然し發達し盡して生れたのでないから虚弱を免れない。

第八月の終には、十五吋から十七吋、重量は五ポンド。

第九月の終には、十七吋から十八吋、重量は五ポンドから七ポンド。

第十月(臨月)の終には、胎兒の身長十七吋乃至十九吋となり、重量は六ポンドから十二ポンドに達する。

第十四章　胎盤と臍帶

胚種の接する子宮内のあらゆる部分は、成長する烈しい活動に刺戟される。數多の血管は成長し、其周圍の内粘膜は胎盤となる。胎兒は其胎盤に臍帶を以て密着すると同時に全身を羊膜に包まれてゐる。羊膜は胎兒を完全に包んで保護の用をするもので、羊膜水と言ふ液を湛へた囊狀の薄膜である。胎兒は其羊膜水の中に浮游して居る。而して羊膜は愈〻出産の間際にならなければ破れない。

胎兒は羊膜水の中に浮游して居るが、唯一點臍帶を以て胎盤に、卽ち母體に連絡して居る。臍帶は、胎兒の出生と同時に其胎盤との連絡を切斷されて其痕跡が腹部に殘る。これが卽ち臍である。臍帶は二種の血管から成る其一つはゼラチン樣の物質を含んで薄膜に蔽はれて居る。胎兒と胎盤との間に血液の交換があるのは實に此臍帶を媒介の通路とするのである。然し胎兒の血液と、母體の血液とは決して混合しない。其血管は極めて薄

い膜壁を以て遮られて居る。胎兒の血液が母體の血液から、其必要な成分を吸收するのは、實に此薄い膜壁を通じてのことである。換言すれば、胎兒はそれに依つて成長發達の榮養を攝取するのである。尙ほ胎盤から出る血液は、其酸素を以て、胎兒の血液を養ふ、卽ち、胎兒は、自分自身の肺臟を以て呼吸するのでなく、胎盤の助力に依つて呼吸するのである。

此處に注意すべきことは、母親と胎兒とが神經的には絕對に交涉のないといふことである。母親と胎兒とを連絡する唯一の臍帶は、何等の神經組織をも持つて居ない。從つて母親の神經組織と胎兒のそれとは、全然獨立別箇のものである。母親が神經的の大打擊を受けても、胎兒に直接影響しないといふ理由はこれである。胎兒の影響を受けるは母親の血液に變化を生じた時だけである。

第十五章　哺乳

母親は凡べて子供に哺乳する義務がある。哺乳の出來る限りは哺乳しなければならぬ。母親の乳に代用する程完全な榮養物はない。然し、母親が全然乳の出ない場合、たとひ出ても子供の成長に足りない程に乏しい場合、母親が衰弱する場合、結核其他の疾病に罹つて居るか或は其懸念のある場合などの哺乳は母親にとつても子供にとつても、寧ろ有害である。

以上の場合、母親が子供に哺乳することの出來ない場合は、止むを得ず人工的に牛乳を以て育てなければならぬ。一定の方則を定めて、それを守りながら、一方壜と乳頭とを消毒して用ゐれば、牛乳も母親の乳と同樣、決して有害なものではない、子供は完全に育つ。然し不幸にして子供が病身であつたり虛弱だつたりして、牛乳其他人工的食品では育たない場合、是非共乳母を用ゐなければならぬ。乳母を傭ふには豫め愼重な注意をして、乳母なる女が健康體であるかどうか、乳母自身の子供が、哺乳される子供の年齡も

大差ないかどうか、殊に、黴毒の潛伏する懸念はないかどうか、等の點を調査しなければならぬ。ワッセルマン氏血液檢査の兩三回は少なくも行つて、疑問を解いた後でなければ、安心することは出來ない。

母親は、哺乳が子供の爲めにいゝばかりでなく母親自身の爲めにもいゝといふことを知らなければならぬ。先づ哺乳は、母親の子宮を舊態に復するに役立つ。分娩の爲めに極度に膨脹した子宮は、子供に哺乳することに依つて、非常に早く常態に返る。然るに此事實を知らないで自分一身の都合上から乳母に賴らうとする女子のあるは悲しむべきことである。

哺乳する母親は勿論充分の滋養物を採らなければならぬ。然し俗に、妊婦の飲料として麥酒又は酒類を勸めるが、其結果は甚だ惡い。而して又、母親が妊娠中に酒精飲料を用ゐれば、胎兒に影響して、後年飲酒家になるだらうとの說は、決して一笑に附すべきではあるまい。酒精飲料の代りに、牛乳、鷄卵、肉類、果實、野菜などを豐富に用ゐるがいゝ。

乳頭の注意。嬰兒を安全に育てようとするのには乳房の乳頭を完全に

して置く必要がある。例へば乳頭が餘りに凹んだり下向したりしては嬰兒に苦痛を與へる、嬰兒は吸ひ付かうとする努力に疲れて仕舞つて、而かも多量の乳を吸ふことが出來ない。然し又乳頭が柔軟に過ぎたり、龜裂を生じたりしては却つて母親に苦痛を與へるからいけない、常に適當な狀態であることが必要である。

それ故、乳頭は、適當な時期――先づ五ヶ月、遲くも六ヶ月目からは注意する必要がある。卽ち、乳頭が充分に發達して居る場合は特に手當をする必要はない。唯、硼酸水(茶匙一杯の硼酸を水に溶かした液)を以て時々洗滌すればいゝ。然し萬一乳頭が凹んで乳頭全體の表面よりも低い場合、或は表面より稍、高い位の場合、先づ一日に數回は指を以て乳頭を引出すやうにしなければならぬ。それを續けて行へば從來低く凹んだ乳頭でも哺乳に適するやうに發達する。此方法は少數の例外を除き、大抵は成功するものである。

乳頭が柔軟に過ぎる場合、それは一日に數回、酒精と水との混合液を以て

洗ふ。水三に對して酒精一の割合で充分である。洗つた後で乳頭を乾かし、ワセリンの頭を塗る。これを姙娠最後の二三ヶ月に亙つて行へば大抵は健全乳頭となるものである。

龜裂した乳頭。乳頭の龜裂を生じた儘放擲して置くとは、哺乳する際に母親に非常な辛痛を與へる。其場合は、タイモル・アイオダイド半ドラム、すリーヴ油半オンスの調合藥を、以て乳頭を拭ふがいゝ。此方法を一時間毎に行つて(勿論哺乳する間を見て)乳頭を脱脂綿で包んで置く。而して必ず溫湯又は溫硼酸水で洗つてから哺乳させる。勿論、嬰兒の口も哺乳前に硼酸水を以て消毒しなければならぬ。嬰兒は口中に多くの黴菌を含んで居る。それは嬰兒自身には感染しないが、母親には非常に危險である。乳頭の龜裂から黴菌が侵入して、乳房炎の原因となつたり、膿腫の原因となつたりする。若し乳頭の龜裂が烈しい場合は、(時々哺乳に堪へない者がある)一方の乳房を休ませて、他方の乳房だけで一日位の哺乳を濟まさなければならぬ。而して大半治癒するを待つがいゝ。

乳の分泌を中止する場合。突然子供の死んだ場合或は、突然母親が哺乳不可能となつた場合などには、乳の分泌を中止する必要がある。昔は(近年まで)此場合、乳房を堅く繃帶したり、數時間毎に溜る乳を搾り出したりして居た。然し此第一の方法は無用な苦痛と厄介とを蒙り、第二の方法は、一時的に緩和することは出來ても結局、何等の效果もない。否却つて乳の分泌を中止しようといふ本來の目的に背く。即ち乳は搾れば搾るだけ溜るからである。此場合に最もいゝ方法は、放擲して置くことである。搾り出すことをせず、唯三四日間輕く布を捲いて置く。さうすれば次第に乳は分泌しなくなる。最初の一日か二日が多少の不快を覺えるが、其不快とても、搾り出したり繃帶したりする程不快なものではない。

哺乳中の月經と姙娠。多くの女子は哺乳中には、月經の中止するものである、從つて姙娠するともないものである、哺乳さへ續けて居れば一年二年以上に亙つても姙娠しない者がある。此理を應用して姙娠を避ける者がある。即ち出來る丈け長く哺乳せしめようとする。現にエジプト、其他避

姙方法を知らない諸國には、三四歳になつて尙ほ乳に親しむ子供が多い。これは母親が避姙の目的で哺乳せしめるのだらう。

然し凡べての女子がさうであると言へない。百人中、五十人は哺乳の六ケ月目から月經がある。而かも其次の月經を見ない内に姙娠する者もある。

哺乳中の女子が再び姙娠したことを知つた時、直ちに哺乳を中止しなければならぬ。第一に乳は不良になりがちであるが、たとひ不良にならないまでも、一方に於て胎内、他方に於て乳房と云ふが如く同時に二人を育てることは、母親にとつて餘りの重荷である。

第十六章　流産と墮胎

流産とは通常の分娩期に達しないで胎兒の出生すること、勿論獨立して生活する能力のない胎兒である。殆んど生れると同時に死ぬ。

流産は何等外的原因のない場合にも起ることがある。然し周圍に種々の原因があつて起ることも多い。人爲的に流産を起す場合、其目的が母親の生命を救ふにある場合は、勿論法律上の條文にも觸れないし必要なことでもある。然し其目的が單に不義した母親の面目を救ふ爲め、子供を養育する能力のない一家を救ふ爲めであるとすれば、これは實に大罪である。此人爲的の流産は卽ち墮胎で、發見される時は、母親は勿論周圍の關係者も嚴しく罰せられなければならぬ。

胎兒が何かの理由に依つて母親の胎内に死亡した時、大抵は數時間又は數日間に排出されるものである。然し時には、何時までも胎内に止つて居る。數週間のこともあり、數ケ月のこともあり、異例としては數年間のこと

もある。

一度流産した爲めに幾度も流産を繰り返す者がある。これを習慣性流産と言ひ、姙娠して數ヶ月、時には數週間しか經たない内に流産する。而かも姙娠する毎である。これは必ずしも病氣、殊に黴毒などの原因に依るとは限らない。單獨に起ることが多いのである。

流産の原因。上述の習慣性流産は、多くの場合は、遺傳に依るか、子宮内粘膜の疾病に依つて起るものであるが、それ以外の流産は、主として黴毒を原因とする。而して姙婦が二度ならず三度も四度も流産すれば、一般に吾々醫師は原因を黴毒だらうと斷定する。而かも此斷定は殆んど適中すると言つていゝ。

第十七章　分娩前の注意

分娩前の注意と言へば、胎兒出生までの姙娠中の攝生と解せられるが普通である。然し廣義に解すれば、姙娠中は勿論、姙娠前の父母の攝生とも解せられる。

勿論、父母共に姙娠中及び姙娠前、精神的にも肉體的にも出來る丈け健全であるがいゝ。殊に母親は最も注意して、肉體の健康增進を圖ると同時に、精神の安靜を得るやうにしなければならぬ。母親が健康であるかどうかに依つて、出生兒は著しい影響を受けるからである。

世の中には、此問題に關して隨分馬鹿々々しい議論が行はれて居る。而かも取るに足りない其愚論に欺かれて、悲慘な結果を招いた幾度かの例を著者は知つて居る。私は其時思つた。此愚論を打破して眞理を立てるのは自分の使命であると。此誤謬に充ちた皮相な俗論を、少しでも此處に破らなければならぬ。

繰り返して言ふ。母親は分娩するまでの間を完全に健康な狀態で居なければならぬ。然し氣分が惡かつたり、心配したり、怒つたりすることが、直接胎兒に有害な影響を及ぼすと考へるは愚である。大袈裟な俗論は往々此ことを誇張して說き、其爲めに姙婦は非常に惑ふものである。然るに晗兒は私が既に說いたやうに、母體との間に神經的の連絡はない、神經的の障害に依つて何等の影響を受けない。但し極端な場合、憤怒の極、激動の極には、時として影響を受けることもあるが、これは稀に見る例外である。

私は幾多の實例を知つて居る、――ある子供は、其母親の姙娠中殆んど毎日のやうに憤怒と苦惱とに過されて生れた。生れて見れば完全な立派な子供である。ある母親は、其姙娠の日から分娩の日まで常に烈しい嫉妬の爲めに、燒くやうな苦痛を嘗めて來た。而かも生れた子供は極めて完全な狀態で、現在でも青年の卓れた典型と言つていゝ。又、或母親は姙娠中、肺炎、腸膣扶質、其他危險な疾病に襲はれた、而かも生れた子供は矢張り壯健であつた、精神的にも肉體的にも些の缺陷がなかつた。更に、或母親は是非とも

流產したいとの目的で種々の內服藥を飲んだ爲め、遂には生命にも關する病氣になつた。而かも矢張り子供は壯健無類であつた。或母親は、器械的方法を用ゐて墮胎しようとして、所謂墮胎專門家の許に賴つた。而して二三の器械的方法を受けたが其結果は面白からず、子供は健全な狀態で生れた。而して肉體的にも精神的にも卓れて居た。

勿論、私は姙婦にこれをせよと勸めて居るのではない。悶えたり、怒つたり、病氣になつたり、毒を飲んだり、墮胎しようとしたりすることを決して勸めない、唯だ、私は、分娩前の注意を極端にする必要はない、姙娠中に不必要な心配をして、あれもいけない、これもいけないと杞憂することはない、といふことを一般の姙婦に敎へたいのである。胎兒はさう影響されるものではない。姙娠中の注意よりも寧ろ、精子と卵子とが出會つた時の狀態の方が重大なことである。

世の中には、萬事に就いて誤つた解釋を下して喜んで居る愚かな人々が多い、それ故私は明白なことではあるが、姙娠中の衞生を放揶してはいけな

いと力說したのである。母親は肉體にも精神的にも發達させようとする爲めには、出來る丈けあらゆる方法を採らなければならぬ。然し、これに關して、餘りに夢中になるは却つて惡い、餘りに極端に考へて、あれこれと杞憂するは惡い、卽ち誇張して考へるは惡い。此ことを特に最後に繰り返して置きたい。

第十八章　不姙症

不姙とは子供を儲けることの出來ないことである。昔は、夫婦の間に子供のない時、其罪は凡べて女子の負ふものだといふ說に支配されて居た。男子にも責任があるかないか、それは考へても見なかつた。現在では夫婦の間に子供のない時、罪の一半は男子にある、女子のみの責任ではないといふことが解つた。それ故、夫が醫師の檢査をも受けないで、妻だけが治療して姙娠しようとするは愚である。先づ夫の精子が健全であるか否かを檢査するがいゝ。然し今日尙ほ、下層社會の人々、或は無知な人々の間には、妻にだけ責任があるものと認めて居る者が少なくない。數年に渡つて妻は醫師から醫師へと診療を乞ひながら煩悶する。而かも後になり夫の精子を檢査して見れば、罪は妻になく夫にあつたといふ例を私は知つて居る。

一度姙娠して子供を儲け得ても、再び姙娠しない者がある。それは一般に、子宮に通ずる喇叭管の端が閉鎖した爲めである。卽ち卵子が卵巢から

喇叭管を通つて子宮に達することが出來ないからである。此疾病は屢〻分娩の爲めに起る。分娩其ものが原因となつた炎症の爲めか、又は夫から感染した病毒の爲めか、種々の場合がある。

姙娠及び分娩の條件としては先づ女子の生殖器が內外共に常態でなければならぬ。卵巢は健全な卵子を排出し、卵子は完全に子宮に達し、而かも精子と都合よく出會はなければならぬ。子宮の內粘膜は勿論健全であり、受胎した卵子は子宮內の一點に固着して、何等の故障もなく發達成長する必要がある。病氣に罹つたり、榮養が足りなかつたりしては無效である。

吾々は常に、子孫を創り其永續を圖る職務は、男子よりも女子に於て特に重大であることを記憶しなければならぬ。男子は單に其精子を射出すれば職務は終る。然るに女子は、其後に却つて大きい責任を負つて居る。

不姙の原因は、女子の場合極めて多い。(一)最も主要な原因は、痳病其他の炎症から起る喇叭管の炎症である。(二)白帶下は烈しい時に於て原因となる、精子に會つて、其活動を殺すからである。(三)子宮の前轉又は後轉が餘り

に甚だしい時も不姙の原因である。(四)先天的に身體の虛弱な者、貧血の者などは、姙娠能力を持たないことがある。然しそれは常にさうであるとは斷言されない。往々にして肺結核患者、而かも殆んど危機に迫つて居る者で姙娠した例が少なくない。

黴毒は不幸にして不姙の原因となる位のものである。

不姙症の治療は、極めて熟練した醫師に賴つて初めて成功する、殊にそれのみの專門醫でなければ、完全を望むことは出來ない。不姙症に惱んで居る女子、子供を欲して居る女子に向つて、私は決して手療治をする勿れと言ひたい。くれ〻も繰り返したい。而して夫の檢査するを待つて檢査せよとも言ひたい。不姙の原因が單に女子にのみあるわけでない、同じく男子にもあることを注意したい。

第十九章　月經終止

第六章で、月終止期のことを簡單に說明した。此章には更に稍詳しく說明する。

月經終止期は字義の通り、女子の月經が終止する時期の稱である。其平均年齡は四十八歲であるが、或者は五十歲、五十二歲、時としては五十五歲に及ぶ。反對に四十五歲、更に四十二歲の者もあつて、必ずしも一致するものではない。四十四歲乃至五十二歲が先づ常態、それ以外は異例と認めていい。

月經終止期に際して、全然肉體的にも精神的にも障害を來さない者がある。恰も月經初潮の際、何等の障害を感じない者がある如く、又月經中生涯を通じて苦痛を感じない者がある如く、終止期にも感じないものがある。月經と月經との期間が稍長くなり、或は稍不規則になつて、其排出の量も次第に乏しくなる。遂には殆んど見分け難い程の量になつて、最後に永久的

に終止する。然し一般に多くの女子は、此月經終止期に際して、其最後の一二年を非常に苦しむ者である。苦痛は肉體的にも精神的にもあるが、後者は特に著しい。頭痛を覺え、氣儘な食慾が起り、或は食慾が減退し、肉が目立つて落ち、或は反對に肥滿し、氣六ヶ敷しくなり、不眠症に襲はれ、非常に發汗する。熱い閃光が身體、殊に顏面にふと現はれて、屢顏を赤めさせたり充血させたりする。而して段々に女子の性格に變化が始まる。從來柔順で謙讓だつた性格が、事を好み爭を好むやうになる。何等の根據もない嫉妬に耽り、(これが不愉快な特徵の一つ)其爲めに夫との間に家庭の不和を招く。異例ではあるが、時には眞性の精神病となることさへもある。

苦痛の原因。月經終止期に起る多くの不快な特徵は、終止期そのものが原因でなく、終止期に就いて幾世紀の間勢力を占めて來た誤謬が原因である。――これは私が數年來考へて得た信念である。吾々は、精神が肉體に及ぼす影響を知つて居る、間違つた思想が、感情に惡結果を齎すことを知つて居る。世間一般に、女子は勿論、男子も凡べてが、而かも無識階級のみでな

く醫師仲間に於てさへも、月經終止期は女子の性的生活の最後であると考へて居る。あらゆる女子は、月經の最後である此終止期を誤解して、既に女子でなくなつたのだと考へる。而かも男子にも成れないから、男子でも女子でもない、中性生物だと考へる。而して最早夫に對し、他人に對し、魅力を感じさせることは出來なくなつたと思ふ。女子がかう考へることは、實に絶望的結果を與へるものである。人間は凡べて其機能(殊にそれが性的機能に於ては著しいが)を最後まで保留しようと努力しつゝあるのではないか。それが全然消滅すると考へることは餘りに堪へ難いことである。

生殖機能と性的機能とは同意異語ではない。――これを先づ知る必要がある。勿論永久に月經が閉塞したのであるから、女子の子孫繁殖の機能、即ち生殖機能は永久に失はれた理である。然し生殖と性的とは異ふ。それ故私は飽くまでも、私の信念を主張しなければならぬ。現在尙ほ努力を占めて居る誤謬を排斥し、滅亡させない以上、何時までも女子の運命は悲慘である。

若し女子が一般に、月經終止期を以て女子でなくなるのではないといふことを知つたならば、女子の生慾は月經終止期より遙かに持續するもの、六十歳になつても、三十歳と同じ慾望を持ち得るものであるといふことを知つたならば、女子の魅力が消滅するは月經終止期であると否とに關せず、肉體全體の狀態に依るものであるといふことを知つたならば、五十歳乃至六十歳になつても、二十歳三十歳前後の魅力以上の魅力を持つ者も多いといふ事實を知つたならば、――月經終止期にある女子は、現在程に悲慘とは考へなくなるであらう。而して其結果、精神的感情的方面の苦惱は、大部分救はれるだらうと思ふ。

卵巢、子宮、外生殖器、乳房などの實際的萎縮は、如何ともすることが出來ない。然し此萎縮は、急激に來るものではない、徐々に變化して、それ自身種々の不快な特徵の原因とはならないのである。

月經終止期に、若し非常な不快と苦痛とを伴つた場合、其處置は熟練した醫師に一任すべきである。簡單な正直な忠告さへ與へたならば、其方が變

な藥劑よりも有效であらう。一般に女子は出來るだけ其生活を平穩安靜にする。溫湯に日々浴し、便秘を防ぎ、陰部を洗滌する。それは不快な赤面を防く效がある。夫は此機にある妻を、平生にも增して親切に勞はらなければならぬ。此四十五歲から五十五歲に至るまでの間は、妻が夫の同情と助力とを最も受けていゝ時である。

第二十章　手淫

手淫とは生殖器を手で弄んだり、摩擦したりする惡習慣を言ふ。惡習慣であるといふのは、それが少女將來の健康と發達とを妨害するからである。手淫を度々行へば、それ丈け害も甚だしい。而かも害は稍〻永久的である。此點で少年の場合よりも、女子の場合更に有害であると言へよう。

手淫に耽る少女は、單に肉體を消耗して、貧血となり、暗蒼色の不快な顏色となるばかりではない、成長して結婚期になつても、正則な性的慾望が更に起らない、結婚後も、夫との正則な接觸に依つては、何等の快樂を受けることが出來ない。彼女等は變態性慾の方面に走つて居る。事實、手淫癖のあつた少女の中には、正則の交接を却つて嫌厭し、其爲めに家庭の圓滿を缺く者が多い。時には、其夫が離婚を要求しなければならぬこともある。然し幸にして、少女の手淫は、少年の場合のやうに、萬人が萬人といふ譯でない。少年の手淫に就いては既に說明した通り、少なくも八十パーセント以上の百

分比となるが、少女の場合、それは僅に十パーセント乃至廿パーセントに過ぎない。然し百分比がどうであらうとも、手淫は有害である。若し少女が其健康を尊重し、美と成長と、精神的發達とを尊重するならば、決して手淫に耽つてはならない。然し既に手淫癖の奴隷となつて居るならば、所然それを破らなければならぬ。一方、母親は其子供の日常に注意して、惡習に染まないやうに、或は中止させるやうに、出來るだけの方法を採らなければならぬ。

兩親の態度。兩親がその子供の手淫癖に陷つて居ることを發見した時、恐らく非常な不幸に襲はれたと感ずるであらう。然し子供が盜人になつたり、放火狂になつたりしたことを發見した時のように、罪に觸れたと考へてはいけない。中世紀時代の思想に囚はれて、手淫を、有害であると同時に罪惡であると考へる者がある。而して子供を叱責し、威嚇し、非常に恐怖すべきこと、非常に不面目なことであると信じさせ、直ちに中止しなければ、實に悲慘な結果を招くものであると說く。――かうした訓戒は却つて正反對

の結果を生ずる。手淫癖を矯正する目的で訓戒しながら、事實は、手淫癖其ものよりは悲慘な結果を招くのである。

訓戒したり叱責したりするに他人の面前でするものがある。これは非常に惡い。叱責される子供の胸には、拗ねくれた怒りと恨みとが何時までも殘つて、其爲めに一層惡習慣を脫することが出來なくなる。子供が醫師の許に連れられて來た時、其態度、其消然とした態度、拗ねた態度、涙を忍んで居る態度などを見て、子供が醫師を何と見て居るか、容易に知ることが出來る、彼等は丁度、若い罪人が、審問の席で判事を見ると同じ眼で、醫師を見て居るのである。

而かもかうした兩親の態度は、依然として改まらないで居る。若し此態度を棄てる時があるとすれば、それは現在でなければならぬ。有害、無益――それを先づ棄てゝ、廣く一般の兩親と一部の醫師とは、此手淫の害が、餘りに大袈裟に誇張されて居る事實を知らなければならぬ。少年少女の大多數は、手淫の害を殆んど知らないで陷つたものである、それ故、此眞相を忌憚

なく説明することは、單に兩親と少年少女とを、其苦惱の中から救ふのみでなく、又、手淫癖を脱するに役立つだらうと思ふ。

吾々は手淫癖のある少女に、同情の眼を以て接しなければならぬ。手淫は決して罪惡ではない、といふことを繰り返して説明する。然し將來の身心の成長と發達とに、非常に惡い影響を及ぼすといふことを、丁寧に親切に教へなければならぬ。此同情と親切とを以て、眞實を説明すること、それが、少年少女の手淫癖を打破するに、どれ程有效か知れない。現在では、尙ほ世間の人々に私の主張が認められないが、嘗て私の書いた意見は、恐らく、此問題に就いての眞理であらうと思ふ。

「適度に行ふ手淫をも非常な惡德であると言つて非難することは、却つて其手淫者に有害な結果を與へ、益、習慣の打破を困難にするものである。醫師乃至性慾學者の殆んど全部が、口を揃へて手淫の害を説く。而かも大袈裟な誇張した口吻を以て説く爲めに、必ず反對の結果を生ずる。手淫者は自分自身を墮落し果てた人間だと考へるやうになる。到底救はれない者

だと絶望するやうになる。而して自尊心を失ひ、愈、習慣の奴隷となるに至るのである。」

かく私が説いても、私は決して手淫の害を否定しようとする者ではない。勿論、其害を認める、殊に、それが幼少年の時代から犯された者にとつては、實に其害も甚だしい。又、たとひ私が手淫の惡影響を縮少して考へるものであると否定しても、尙ほ其方が、かの長い間多くの人々にとつて説かれた大袈裟な誇大な態度よりも、遙かに害を及ぼす程度が少ないのである。それ程、過去に於ては、眞理でない誇張のみが説かれて來た。

手淫の治療に關する問題は凡べて藥劑的療法に屬すべきもので、此處にそれを説く限りではないが、子供を手淫癖に陷れまいとする豫防法を、二三此處に注意して置く必要がある。本書が單に少女諸君の讀物たるに止まらないで、又廣く父兄にも讀まれる場合のあることを期して居るからである。

手淫癖の豫防。豫防法として最も根本的なことは、先づ嬰兒時代から子供の監視を忘らないことである。吾々の知つて居る範圍内に於ても、馬鹿

な子守、不良な乳母などの爲めに惡習慣を敎へられた實例が少なくない。時に家庭敎師に依つて故意か偶然か、敎へられることもある。それ故、先づ此點に注意するがいゝ。

九歲、十歲、十一歲位の子供でも、幼いからといつて、單獨に放擲して置いてはならない、常に信ずるに足る監視者を附けて置かなければならぬ。少年と少女との、餘りに親しい交遊は成るべく禁ずる。禁じないまでも注意する、殊に年齡の差ある場合はいけない。

多くの少女を一定に寢させることはいけない。父兄の監視がある時は別である。

同一の寢床に、二人の少女を一緒に寢させることはいけない。子供同志子供と大人との場合、何れを問はず禁ずるがいゝ。勿論一方が父母姉妹ならば別である。故意でなく、偶然に手淫を覺えることは、屢、肉體の近く接觸することに依つて起る。

子供(少女の場合も少年の場合も)は、一人で寢させるがいゝ。寢床は稍、

硬いものを選ぶ。掛布は輕いもの、而して毛布などは足の先までを蔽ふものがいゝ。兩手を毛布又は蒲團の外に出して眠る習慣、決して中に入れない習慣を、幼年時代から附ける。それは決して困難ではない、而して一旦習慣になれば、非常に手淫癖の豫防となるものである。

寢床の中で轉がらないやうに、而して朝眼覺めたならば愚圖々々しないで直ちに起上るやうにする。飛び起きることは、性格を强固にし、肉體を壯健にし、意志をも健全にする。

九、十、十一歲、十二、三歲(九歲の子供にして十三歲の子供位に發達した者もあり、其反對の者もあることを念頭に置く)に達したならば、手淫の說明をして聞かせる。生殖器を弄ぶことはよくないこと、それを勸めるやうな友達は惡い者であるから、遊ばないやうにすること、性的關係の事柄一切を、兎角口にしたがる子供は避けるがいゝこと、――さうした知識を親切に正直に敎へなければならぬ。

熱湯は、手淫の方向に導いて有害である。青年の性慾が、熱湯の爲めに誘

發される場合は極めて多いが、少年少女にとつても同樣である。最初の手淫を熱湯に入浴中、覺えたと自白する患者は、私の知つた範圍でも可成多い。勿論、一度覺えたならば、其快感を刺戟されて、二度三度と習慣性になるのである。

多少でも手淫を誘發すると思はれること一切を避ける必要がある。局部に生ずる濕疹其他も、放擲しないで全治すべきである。其他、性慾を早く眼覺ましめること一切を禁ずるがいゝ。淫卑なる歌劇、舞踏などを始めとして、戀愛小說なども善くないものである。

精神的手淫。少女の中には、直接手をもつて局部を弄ぶことはしない、卽ち觸手的な手淫は行はないが、所謂精神的手淫に耽る者がある。それは、精神をある異性の一點に集中させて、あらゆる猥褻な場面を腦裏に描き、遂に滿足するまで續けることである。此精神的手淫は、普通の手淫以上に心身を疲勞させて有害な影響を與へる。時としては性的神經衰弱其他の疾病を起すことがある。如何なることがあつても、これ丈けは禁止したい。

第二十一章　白帶下

白帶下は膣から排出する白色の「おり物」で、近代の女子が非常に苦しむもの、一つである。少なくも百人中、二十五人は(或學者は五十人と言ひ、或學者は七十五人とも言ふ)多少の相違こそあれ、齊しく罹つて居る筈である。症狀は、或場合、極めて輕く、單に不快に止るだけのことであるが、又ある場合には、全身が衰弱したり、脊部の苦痛を覺えたり、局部の辛痛を感じたり、腫物を生じたりする。而かも治療は一般に困難であるが、殊に處女の場合に困難である。元來、白帶下は膣から生ずるものでなく、其原因は遠く子宮頭にある。それ故、たとひ膣の手當だけが完全しても、根本の子宮が治らない以上、永久に白帶下は止らない。これは唯だ熟練した醫師が子宮鏡を用ひて初めて治癒することの出來るものである。白帶下の治療が、處女の場合に於て殊に困難であるといふのは、此理由の爲めである。處女は、其處女膜の破裂することを恐れて、子宮鏡を用ゐたりする局部的治療を避ける。其結果、

遂には白帶下が益〻多くなつて、子宮乃至喇叭管の慢性炎症を起すことがある。女子の不姙症の多くは、處女時代の、長年月に亙る白帶下の爲めであるといふことは殆んど疑を入れない。輕視しないで醫師の手に賴ることは、やがて將來の幸福を生む基である。

白帶下の原因は何か。此質問に對しては簡單に答へることが出來る、女子生殖器の何れかの部分に加答兒を起した爲めであると。然し此答は完全ではない。それならば、其加答兒の原因は何か？それを研究しなければならない。

加答兒の原因は極めて多いが、最も普通に見られるものは、寒冷に犯されることである。足部を冷やして、惡寒を受けることは常にいけないが、殊に月經中には、其爲めに子宮頭の加答兒を起すものである。長く佇立すること、重荷を持つたり運んだりすること、溫度の高い室で舞踏しながら突然冬の夜の外氣に觸れること、性慾の衝動を受けて而かも長く充たされないこと、外生殖器を不潔にして放擲すること――凡べてかうしたことが原因となつ

て、子宮頭の加答兒を起し、更にそれが白帶下の原因となる。一般に、窮迫した狀態、苦惱、新鮮な空氣の缺乏、過度の勞働乃至勉强などは、子宮の加答兒又は白帶下の原因となり易い。それ故、白帶下の治療には、一般的方法と局部的方法とがある、而して二つを共に用ゐなければ成功しないものである。

一般治療の方法。それには先づ一般的の衞生を注意して守らなければならぬ。患者は、自分の力に過ぎた運動をしてはいけない、疲勞するまで歩くのはいけない。大股に早く歩くよりも小股に遲く歩くがいゝ。コルセットは近代式のものを用ゐる。卽ち子宮だの內臟器官だのを壓迫して底下させる舊式のコルセットは廢して、股壁を支へ內臟器官を上部に安定させる新式のものを選ぶ。ボタンは寬やかにして、呼吸の自由を妨げないやうにする。便秘に罹つた際は直ちに治す必要がある。(便秘に就いては第十章、姙娠の項に說いたから參照のこと)而して內臟器官を順調に活動させる。貧血又は一般に虛弱の爲め、白帶下を一層甚だしくすることもある。其際は何か鐵劑の强壯藥を服用する。毎日冷水を手拭に浸して摩擦するのも

亦一法である。

局部的治療の方法。これには種々あるが、主としては膣又は子宮頭の洗滌と藥劑の挿入とである。膣又は子宮の局部的處置は、勿論醫師に一任すべきであるが、藥劑の挿入だけは、患者自身が行ふも安全である。

如何なる場合でも、常に醫師に相談する位、安全な方法はない。即ち概して、患者自身の手療治なるものは行はないがいゝ。然し或二三の場合、種々の理由で婦人科の醫者に掛ることを非難されたり、又貧困の爲め醫師に支拂ふことの出來なかつたりする場合、止むを得ず手療治をしなければならぬ。かうした周圍の事情あるものは、患者自身で治療の方法を講ずることも亦結構である。唯、それには絶對に害のない、安全な方法を採る必要がある。

最も簡單な方法の一つは、明礬の挿入である。先づ拳位の大きさの海綿一個を求めて、其中心に茶匙一杯程の粉明礬を包む。それを強い絲で縛つて、徐々に膣内に挿入し、出來るだけ深く入れて、約廿四時間其儘に放擲して

置く。廿四時間を經たならば絲を手繰つて徐々に海綿を取出す、而して後を微溫湯を以て洗滌する。此方法を隔日、又は三日毎に行ふのである。此極めて簡單な方法丈けで全治した例を、私は度々見て居る。然し又或場合には、沃度丁幾などを以て治療するがいゝこともある。此方法は、先づ沃度丁幾四オンスを求めて來る。而して茶匙二杯の量を採つて、それを二クォート(一クォートは日本の六合――譯者註)の熱湯に混合し、囊の中に入れて膣内に注入する。此方法は、一日に二回、朝と夜と行ふがいゝ。沃度丁幾の代りに乳酸を用ゐるもいゝ。一パイント(約三合一勺)の乳酸を求めて、大匙二杯の分量を二クォートの水に混合して用ゐる。乳酸は無色であるから、沃度丁幾が暗黑色の爲め接觸する物凡べてを汚すに比し、非常に使用に便利である。場合に依れば、此二つの方法を交代に、即ち今日は沃度丁幾、明日は乳酸といふ風に行ふことも有效である。症狀が稍輕くなつてからは、沃度丁幾ならば茶匙一杯、乳酸ならば大匙一杯を、二クォートの水に溶かして用ゐれば充分である。此方法は何れにしても、非常に有效であり、且つ素人

が行つても何等の害がない。唯一點、注意すべきことは、注入に際して立つて居たり、屈んで居たりしてはいけない。さうした姿勢では、水が悉く外に出て仕舞ふ。必ず安臥して居なければならぬ。

患者は此方法を行つてから、晝間ならば約三十分間、夜間ならば其晩中、安靜に寢床に横はつて居る必要がある。それは膣全體と子宮頭とに充分機會を與へて、效果の實を擧げる爲めである。

決して賣藥を用ゐてはいけない。

第二十二章　花柳病

花病柳には三種卽ち痳病、黴毒、軟性下疳等がある。此中、痳病が最も廣く蔓延し、黴毒が最も恐しい。痳病と黴毒とに比較すれば、軟性下疳は稍輕症である。

花柳病は殆んどの場合、其全體の九十パーセントは、男女の不義の接觸(結婚以外の形式、賣淫其他)に依つて感染する。然し時には、接吻、手拭等を媒介として感染することもある。痳病は一般に、直接の接觸に依つて感染し、黴毒は接觸に依るは勿論、更に廣く種々の物體を通じて感染する、交接中に感染しないで接吻、手拭、齒楊子、剃刀などから感染するは、多く黴毒である。昔は、醫師さへも、屢〻患者の黴毒に感染した。指を其儘膣内に挿入して病毒の有益を檢査したからである。然し現在では、さうした場合の專用手袋が發明された、醫師は決して指を露出しない、それ故、患者から感染することは殆んど稀である。

一般の人々も、無意識に病毒に感染することのある事實を知つて來たから、現在では、直接交接以外の媒介で感染する場合は、極めて(昔に比較して)少なくなつた。公共の手拭、コップ等の危險も稍〻減じて來た。更に社會各階級が清潔を重んじ、疑はしい男女の接觸した時は、直ちに消毒するやうになれば、直接交接に依る花柳病の感染も、遙かに率を減ずるに至るだらう。害毒の危險を知ると同時に、衞生思想の普及するを待たなければならぬ。

第二十三章　花柳病の範圍

昔、僅々數年前までは、墮落し果てた者を除いて、凡べての女子が、花柳病の存在を知らなかつた。花柳病に關する一切の問題は、禁じられたもの、恥づべきものと考へられて居る。人前では勿論、新聞、雜誌、講談、舞臺などでも、話すことも出來ない、ほのめかすことも出來ないと思はれて居た。

殆んど凡べての女子が花柳病なるものゝ存在を知らなかつた事、痳病、黴毒などの言葉が知られないで居たこと――私がかう言ふのは形容的に言つたのではない、字義通りの意味、卽ち彼女等が全然何も知らなかつたといふ意味である。花柳病に關する知識を得んとする凡べての道は閉ざされて居た。女子は知らうとしても知ることが出來なかつたのである。それ故、妻が不幸にして夫から花柳病を感染させられたとすれば、彼女は勿論、其花柳病であることを知らないし、又其原因をも知らない。夫から傳染したものであることを知らないから、夫にとつては寧ろ都合のいゝことである。

家庭は益〻圓滿であつた。夫婦の間に疑惑は起らなかつた。

然るに現在はどうであらうか。他の多くの問題が急激に變化したと同樣、或はそれ以上に變化した。極端から極端へと急轉した。昔時の一切の沈默が、字義通りに公開の席で叫ばれるやうになつた。凡べて、男子女子共に、花柳病の危險を警告されて、今日では、其子女を、如何にして花柳病の感染から免れさせやうかと心配して居る。中には誤謬に充ちた誇張の言辭を故意に用ゐて、徒らに恐怖心をそゝつて居る者もある。殊に、男子の花柳病の蔓延、其女子に及ぼす恐るべき害に就いては、寒心すべき虛僞が、誠しやかに報告されて居る。これは半世紀程以前に、當時紐育に居た獨逸の醫師に依つて、最初の報告が發表された。それに依れば、男子の中、八十パーセントは凡べて痳病に犯されて居り、痳病に犯された者の中、九十パーセントは、不治の儘で、妻に感染するものであると言ふ。これは實に驚くべき、寧ろ滑稽な誇張ではないか。若し、之を眞理だとすれば、恐らく今日、人類は滅亡に瀕して居るだらう。それにも拘はらず、此報告は、金科玉條として、科學的に滿

足すべき絶對眞理として、次から次へと、書物に寫されて行つた。

紐育の名聲の高い醫師、モローー博士は、世人を花柳病の危險に注目させる爲め、種々の盡力を惜まなかつた。然し、彼の說明其ものは識者の意に滿たない、寧ろ悲しむべきものであつた。例へば彼は花柳病の蔓延した率に就いてかう言つた。――娼婦よりも、一般の無邪氣な女子（既婚の女子）の方が、遙かに花柳病を持つて居ると。かうした說明は、眞の眞面目な研究者を失望させると同時に、其誇張に噴飯させるのである。而かも此同じモローー博士が、「娼婦は凡べて（全然例外はない）一度以上、花柳病に罹つて居る筈だ。」と說いて居る事實を、吾々が眞面目に考へ合したならば、其說明の滑稽な馬鹿馬鹿しさに、益〻呆れるだらう。彼の說明を敷衍して見れば、卽ち、――娼婦は凡べて花柳病に犯されて居る。而かも娼婦よりも一般の既婚婦人の方が花柳病を多く持つて居る――といふことになる。凡べて、卽ち百人中、百人（百パーセント）が花柳病に罹つて居る娼婦以上に、花柳病を持つて居るといふ、一般の婦人は、百人中、幾人の率、換言すれば、何パーセントの率を持つて居るの

だらうか。

モロー博士の説明が、滑稽な誤謬に過ぎないことを、更に證明する爲めに、眞の花柳病研究學者の信ずる百分比を此處に記して置く。それに依れば、既婚婦人にして花柳病に感染して居る者は、僅々五パーセント、卽ち百人中、五人を出でないといふことである。

現代の誇張は、昔時の沈默の反動として起つた。何れも極端である。然し沈默よりも誇張の方が未だしもである。唯だ現代の誇張は、多くの少女を、不幸に導く。疑惑と偏見とを懷かせる。其結果、少女は異性の凡べてに反感を持つて、結婚其ものを意味もなく恐れる。少なくも、さうした傾向になり易い。ピッツブルグ大學の心理哲學科のミリアム・シー・ゴウルドの完成した研究は、大いに、吾々の此言葉を強く確めて呉れた。

女史は五十人の若い女子と內密に懇談した。五十人の內半數は女學生、半數は學校に通つて居ない女であつた。女史は、少女が若し賣淫、花柳病等に關する知識を持つて居たならば、それが心理的に如何なる影響を及ぼす

かを調査する目的で、三四の質問を試みて見た。女史は其結果を發表して、結論でかう言つて居る。「神經衰弱、憂鬱症、厭世思想、性的嫌惡などの方面に近い少女は、花柳病に關する知識を得てから生じたものであることが、多くの場合發見される。私の會つた五十人の少女の中、十一人は、男子を嫌惡した。さうした知識を知らない以前は勿論、男子との交際を好んだ者が、それ以後、厭になつたと言ふ。六人は、男子の道德的純潔を全然信じないと言ふ。八人は、結婚を既に拒絕した者、拒絕しようとする者である。理由は、花柳病の感染は、餘りに恐ろしいからだと言ふ。若し男子に花柳病さへなければ、言ふまでもなく、喜んで結婚すると言ふ。彼等はかうした決心をした爲めに、皆、多少の相違こそあれ、不幸を招いて居る。」と。

若い女子を純潔に守り、花柳病に感染させまいといふ目的(目的だけを採つて考へれば、實に奇特な感ずべきことである)を以て、現代の誇張的學者は、花柳病の説明に專心努力しつゝある。其爲めに、少女達は、此通り結婚を恐れ、將來共に獨身で暮さうとさへ言ふ。而かも女子の獨身生活は、それ自身

で屢、神經衰弱又は憂鬱症の原因となる。かくして彼等は、正しい目的の爲めに、反つて反對の結果を招きつゝあるのではないか。

以下私は花柳病に關する眞實の知識を、全然隱すことなく、全然誇張することなく、記したい。勿論、絶對に正確なことは知るべくもないが、公平な見地から、社會の各階級に亙つて研究し、病院其他の報告を基礎として進めば、稍、正確に近い率を知ることが出來る。それに依れば、青年(男子)百人の中、二十人(廿パーセント)は、一度以上、痲病に罹つて居る。其中、恐らく九乃至十パーセントは、結婚の時になつても、治癒して居ないだらう。而して結婚婦人の四乃至五パーセント(或學者は二パーセントと言ふ)は、夫から感染する。結婚して夫から感染する率は、此通り僅かである。然し不幸にして此二乃至五パーセントの中に含まれた者は、殘りの九十幾パーセントが無事だからとて少しの慰安も得られないだらう、同じく悲慘である。それ故、出來るだけの注意はしなければならぬ。

勿論、若い男子(結婚後は其妻も含めて)の花柳病の率は、社會の各階級に依

つて非常に相違する。下層階級に於ては、約五十パーセントに昇つて、而かも治癒する率は極めて少ない。此は、其道德的意識が、低劣だからではなく、彼等が安價な、花柳病を持つた娼婦に接することが多いからである。且つ感染後の治療を怠るからである。(甚だしい者は、全然放擲して置く。其結果、愈、率を多くする。)從つて下層階級にある妻は、花柳病に罹ることが多い。然し一方、男子の痲病患者が僅に五乃至十パーセントに過ぎない社會もあるが、女子のそれが、更に少なく、一パーセントに充たない社會もある。單に下層社會のみを見ないで、廣くかうした場合もあることを記憶しなければならぬ。

上述した私の意見は、從來あり觸れた册子の說明とは著しく差異がある。「紐育に於ける既婚者の中、八十パーセントは痲病に惱んで居る。」とか、「紐育に於ける既婚婦人の中、六十パーセントは痲病患者だ。」とかの說明は凡べて間違つた誇張である。若し眞に觸れた際は一笑に附し去るがいゝ。決して信じてはならない。

黴毒に至つては、痳病の場合よりも更に率が少なく、僅々二乃至五パーセントである。而かもそれを七十五、五十、二十五パーセント位に誇張した說明が多い。勿論誤謬である。然し黴毒は、其率こそ少ないが、害毒の危險に於ては、花も恐るべきものである。

第二十四章

痳病

痳病と黴毒とに關する種々の問題は、拙著「男性の性的知識」(本書の前篇―譯者註)に於て、稍〻詳細に說いた積りである。それ故、此處では、其二つを詳しく論議しようとは思はない。それは一つには、女子に直接觸れる問題でないからである。良家の女子は、多くの場合、男子とは異り、結婚外の性的關係を結ぶことがない、從つて花柳病に感染する危險も、男子に比較すれば、實に雲泥の相違である。私は、唯、此處で極めて簡單に、二三の注意すべき事柄、殊に男子に現はれる症狀と女子のそれとの差異に就いて、類言を費すに止める。

痳病はゴノコッケンと稱する菌の爲めに起る炎症である。ゴノコッケンは千八百七十九年、獨逸プレスラウのナイセル博士が初めて發見した。主として生殖器の粘膜と眼の粘膜とを襲ふ。最初の徵候は、炎症、苦痛、燃燒、膿汁などである。男子にあつては尿道、女子にあつては子宮頭を先づ犯して、漸

次尿道、外生殖器に及ぶ。膣を犯されることは、成熟した女子の場合、殆んど稀である。それは膣の粘膜が成熟して稍硬くなり、ゴノコッケンの成長に適しないからである。それ故、女子の膿汁は主として(或は凡べて)子宮頭から生ずる。然し幼い少女が、何かの機會で痳病に感染したとすれば、其腔が軟弱の爲め、多くの場合、膣又は外生殖器の炎症を起す。(次章を見よ)

痳病は局部的疾病である。例外としては、他の器管に病毒が移ることもあるが、九十パーセントは局部に止つて居る。而して時を遲れないで治療すれば、何等の痕をも殘さないで、完全に治癒し得るものである。但し時を移したならば手遲れとなつて難治となることが多い。

痳病は決して遺傳ではない。嘗て遺傳の爲めに痳病になつた者を見たことがない。嬰兒の眼痳は、遺傳ではない。それは、分娩當時、痳病に罹つて居た母親の膿汁が、子供の產道を通過する際、眼球を犯したからである。即ち遺傳ではなく、單なる感染に過ぎない。分娩の際、豫め消毒液を以て、產道を消毒して置けば、確實に防止することが出來る。繰り返して言ふが、要す

るに痳病は局部的であつて、遺傳しない。其二點が、黴毒と異るところである。即ち黴毒は、全身に亙る病氣であると同時に、遺傳するものである。

痳病の症狀は、男子と女子とで全然異つて居る。男子が痳病に罹れば直ちに氣が付く。第一に膿汁が、何か異狀のあることを知らせる。何故ならば、男子は平生(異狀のない時に)尿道から膿汁を生ずることがないからである。第二に尿の排泄に燃えるやうな辛痛を覺える。然るに女子にあつては、尿道は腔とは全然別箇の通路である。而して尿道の犯される場合は殆んどない。痳菌は先づ子宮頭を犯して徐々に蔓延するが、氣付くまでには相當の日子を經て居る。苦痛は概して男子程甚だしくない。其爲めに女子は放擲して顧みない者が多い。治療すべき大切な時を失つて病毒の蔓延に委せる。たとひ尿道を犯されたとしても、男子程の苦痛ではない。否、苦痛であるとしても特に氣が付かない。女子は苦痛に慣れて居るからである。既に述べた通り五十パーセントの女子は、多少とも月經困難の爲めに、毎月、苦痛を嘗めて居る。又、女子の多くは白帶下に惱まされて居る。そ

れ故、たとひ痳病に犯された苦痛が增しても、「おり物」が多くなつても、特に異狀があるとは考へない。事實、女子の中には、數ヶ月又は數ヶ年に亙る慢性痳病を持ちながら、嘗てそれに氣の付かない者さへ多い。

「おり物」の量が增したり、其色が變つて稍〻靑味を帶びたり、臭氣が甚だしくなつたり、局部に燃えるやうな辛痛を覺えたり、殊に排尿が頻繁に急迫したり、排尿の際に特殊な搔き搖る樣な辛痛を感じたりする。――さうした狀態の時は、女子の生殖器に異狀を來したものと認めて、時を移さず醫療の方法を講じなければならぬ。交接中に苦痛を感ずる場合も亦病毒に犯されたものと認めていゝ。

徵候に氣付くと同時に醫師の治療を行へば、少なくも數ヶ月又は數ヶ年の苦痛を除くことが出來る。然るに氣付かないで放擲して置けば、遂には病毒が、子宮及び喇叭管に炎症を起して、手當の施す術がない。早ければ早い丈け、病毒は單に子宮頭にのみ止つて、治療は容易である。然し多くの女子は、强ひて顧みないで、自ら子宮、喇叭管の炎症を起すに至るのである。

自宅療法。元來私は自宅療法、卽ち患者自身の手療治をば信じない。何故ならば、概して其結果は不良で、時としては危險だからである。それ故、私は、痳病に感染したと氣付いた女子は、一刻を爭つて熟練した名醫の診療を乞へと勸めたい。然し世の中には、(恐らく少數であらうが)醫師の許に通ひ得ない境遇に置かれた者もあるだらう。而して放擲する爲めに、病毒は次第に蔓延する。さうした場合にだけ、私は自宅療法をも不本意ながら勸めたい。少なくも醫師の診療の乞へるやうになる時まで、局部の洗滌を行ふがいゝ。此處に私の說明しようとする洗滌方法は、それだけで痳病を全治するたとひ全治しないまでも、病毒の蔓延を防ぎ、症狀を輕くし、次の醫師の積極的療法を容易にし、且つ些の害をも伴はないものである。卽ちこれは、沃度丁幾の洗滌である。茶匙二杯の沃度丁幾を二クォート(一クォートは約六合)の水に混合して用ゐる。普通の症狀ならば、これを一日に一回、症狀更に困難の時は、一日に二回行ふ。一週間の中五日を此沃度丁幾で洗滌する。而して殘りの二日を乳酸に變へるがいゝ。乳酸一パイント(約三合一

勺强)を求めて、大匙一杯を一クォートの熱湯(百度位の)に混合する。但し熱湯のまゝでは洗滌に困難だから、微溫湯にして用ゐる。此乳酸の洗滌を二日或は三日も續けて再び沃度丁幾に返り、かうして二つを交互に行ふがいゝ。私の知つて居る範圍内でも、他の療法は全然用ゐず、單にこれのみで全治した者を幾人か見た。此方法は同時に白帶下の治療に效驗のあること、既に第二十一章に說明した通りである。

第二十五章　少女の感染

少女の膣乃至外生殖器の粘膜は極めて軟弱である。其爲めに痳病菌其他の感染を受けて、局部に炎症を起すことが屢〻ある。殊に貧困な、育兒院だの病院だのに居る子供の場合に多い。現在では此恐るべき傳染性が餘りに知られて居ない爲めに、直接でなく、間接の器具其他、例へば手拭、下衣、寢床、驗溫器、乳母の手などを媒介として、容易に感染する。然し漸く識者に、其危險が認められ始めて、今日、施療院などでは、此症狀を持つた少女を絕對に入院させない方針を採つて居る。

一般に、少女に感染した症狀は極めて輕微である。少女自身でさへ感染後數週間、時には數ヶ月間、氣付かないで居る。下衣等に附着して乳狀の「おりもの」を發見して、初めて奇異の思をする者は屢〻母親にある。乳狀の「おりもの」即ち從來見なかつた排出物を局部に生ずることが、先づ第一の徵候である。

然し常に輕症であるとは言へない。漸次烈しくなるに伴つて、尿道に感染すれば、排尿の困難、燃えるやうな辛痛、局部又は肛門の周圍の痒痛、下腹部の苦痛を起す。體溫は華氏百一度位に昇騰する。然し同時に惡寒を覺える。感染の最初數週間內に、關節の炎症を起し易い、而してこれは多くの場合、其後まで持續するものである。

上述の通り、これは其症狀丈けを取つて見れば比較的輕症である。それにも拘はらず、感染した少女を非常に悲慘な運命に陷れる。其理由は、第一にこれが、極めて長い頑固な病氣だからである。普通の場合で數ヶ月、全治するまでには數ヶ年を要する。第二に、一旦全治しながら再發するが常だからである。第三に、治療は少女にとつて極めて不快であり、時には苦痛だからである。第四に、少女の心氣を沮喪させるからである。父兄は多く、子供を深く愛しながらも、かゝる病氣を持つたことに關しては好感を持ち得ない者である。皮肉の眼で見ざるを得ない。而かも一方、少女自身は、不快な局部的治療を久しく續けることに依つて、自ら屈辱を感じ、遂には、他人とは

異る不具者ではないかの疑念を生ずる。第五に、少女自身の教育を妨害されるからである。即ち公私何れにしても學校は暫時休學しなければならぬ。第六に、(これは一般の醫師乃至世人には特に注意されて居ないが、私の信ずる處では、最も重大なことである。)感染した少女の性的成熟を早めて、不幸な結果を釀すからである。何故性的成熟の機が早いか。これには種種の原因、――炎症の爲めに局部に充血を起すからか、子宮鏡を用ゐて局部の刺戟を與へるからか、洗滌、藥劑などの關係からか、要するに何れにしても周圍の事情を同一にして生活する他の少女よりも、著しく早熟である。而して性的滿足に對する慾望は更に烈しい。第七に、これが永久の不姙症の重要な原因となり易いからである。これは非常に悲慘な結果と言はなければならぬ。

それ故、これに感染しない爲めには、あらゆる豫防法を講じなければならぬ。先づ子供は常に獨りで就寢させる。凡べての子供を各自別々に寢せるがいゝ。たとひ兄妹、母親、乳母、子守などにしても、添寢をしないがいゝ。

感染の疑念ある場合、如何なる事情があらうとも、絶對に此方法を嚴守する必要がある。

世人は一般に、子供を友達の家庭に泊めて平氣である。たとひ一夜にもせよ二夜にもせよ、これは一考すべきことである。勿論、友達其ものは健全であるとしても、友達の友達、友達の親戚は必ずしも健全だと言へやうか。私は實例に接した。其少女は一週間を友達の家庭に暮して、其周圍の痳病患者の爲めに、無意識に感染した。痳病に惱んで居る青年男女に接近することは、無汚の少女にとつて最も危險なことである。母親は第一にこれを注意し、次には少女の生殖器及び其附近を常に清潔に保つ爲めに入湯を奬め、時には異狀の有無を檢査する。特殊な洗滌液を使用すれば、尙ほ結構である。

第二十六章　黴毒

黴毒は、黴毒菌スピロヘータ・パリーダといふ螺旋狀菌を原因とする。黴毒其ものは夙く數世紀前から論議されて居たが、其原因たるスピロヘータ・パリーダの發見されたのは、極めて最近、卽ち千九百五年、痳病菌と同じく、獨逸の科學者フリッツ・シャウヂンの發見に係る。

黴毒は全身的の疾病である。患者は感染後、數十日乃至三週間後を經て小腫瘍を生ずる。これは初期黴毒の特徵で、これが現はれた時、既にスピロヘータの毒素は血液に混入して、全組織を循環しつゝある。如何なる場合でも、常にこれは全身を犯すもの、局部の腫瘍は要するに一徵候に過ぎない。從つて腫瘍を除去しても黴毒其ものを治癒するには無效である。既に全組織に侵入した後だからである。

感染した時から初期腫瘍の生ずる時、卽ち發病期までを潛伏と言ひ、初期腫瘍の生じた時から、全身の皮膚に種々の發疹卽ち吹出物を生ずる時まで

を第一期と言ふ。これは約六週間を經て第二期に入る。第二期に入れば發疹は次第に粘膜に及び、咽喉、口頭、扁桃腺、膣等を犯す、或は毛髪を脱落する。此時期の長短は、一に患者の治療如何に依るもので、若し方法を誤つたり、放擲したりすれば、二年三年にも及ぶが、完全な方法に從へば僅に數日にして全治し、再發することは殆んどないものである。經過不良の結果は第三期に入る。第三期になれば、身體の隨處に潰瘍を生じ、内臓諸器官にも病毒が蔓延する。最も恐るべき狀態である。然し現在の進歩した治療法の行はれる以上、患者が適當な方法を採れば、決して第三期に及ぶものではない。患者の中には黴毒を些々たる疾病に過ぎないと考へる者が多い。それは初期腫瘍のみを知つて、其後の恐るべき症狀を知らないからである。毛髪の多少脱落する程度で病毒の蔓延は防止出來る。患者さへ治療に熱心なれば、病毒の活動は中止する。それ故、患者が些々たる疾病に過ぎないと考へる。然しこれにワッセルマン氏血液檢査を施せば、勿論、病毒の驅逐されて居ないことを認めるだらう。單に病毒は活動を中絶したに過ぎない。

既に說明した通り黴毒は遺傳的疾病である。兩親、殊に母親の黴毒が劇烈な時は、一般に胎兒は流産されるものである。幸にも、五度六度と引續いて流産する女子がある。然るに、其黴毒が稍〻經過良好の時は、月滿ちて分娩することもある。これは却つて不幸である。死産に終るか、烈しい黴毒を持つて生れて數日又は數週間にして死ぬるか、出生當時は、何等黴毒の徵候を現はさないのみか、一見健全な嬰兒であるが、稍〻成長した後、十歲、十二三歲以後になつて、烈しい病毒を現はすか、此三つの場合が多い。然し健全に生れて健全に成長する者も亦少なくはない。

何れにせよ、黴毒を持つ妻、或は黴毒を持つ夫は、熟練した專門醫の許可のない以上、決して姙娠してはならない、況して分娩してはならない。かく言ふは單に個人的意味ではない、廣く社會の爲めである。女子は黴毒に感染することを欲するならば、勿論黴毒を持つ夫と結婚する權利がある。彼女の肉體は彼女の所有に過ぎない。感染する覺悟の上の選擇に於いて吾々が干涉すべき筈はない。然し彼女は決して黴毒を持つ子供を姙娠し分娩

する權利は持たない。即ち、結婚は個人的問題であるが、分娩は社會的問題である。社會は、かゝる不正の分娩に對して、干渉すべき權利を持つて居る。

女子にとつて黴毒は、男子の場合程に苦痛を伴はない。然し此苦痛の伴はないことは、必ずしも喜ぶべきことではない。否却つて不幸な結果を招く原因となるのである。何故ならば、痳病の場合と同樣、殆んど治療し難い域に入つて初めて氣付くことがあるからである。女子の中には、其症狀の輕微の爲め、何等の異狀がいなと信じ、或は眞面目に、病毒に感染した筈がないと斷言する者も多い。其徵候は殆んど注意するに足りない、而して吾々專門家でさへも、果して黴毒であるか否か、明言することが出來ない。止むを得ずワッセルマン氏の檢査を行へ、漸く其原因を發見する。――かうした場合は極めて多い。而かも其時既に內生殖器は、病毒の蹂躙に委する。それ故、病毒の蔓延する經過は輕ければ輕いだけ治療すべき時を失ふ。其點に於て不幸である。女子は、感染の疑念ある時、夫又は接觸の相手に病毒のある時、等凡べての場合にワッセルマン氏檢査を乞ふ必要がある。

黴毒から生ずる最も恐るべき疾病、脊髓病は、女子には稀である。痳痺狂も、男子には屢、あるが、女子は殆んど犯されない。

第二十七章　花柳病の治療

花柳病の範圍に關して誇大或は誤謬が一般の定說となつて居ることは、既に說いたが、其治療に關しても亦同樣である。吾々は從來の說を點檢して、其誤謬を訂正しなければならぬ。痳病、及び黴毒の治療は絕望であると多くの場合說かれてゐる。而かもそれは餘りに曖昧である。それ故、私は、世人及び專門外の醫師の所謂定說に反對して、飽く迄も私の所說を主張したい。――男子の痳病は適當な治療法さへ講じたならば、絕對に例外なく、治療の目的を達するものである。卽ち完全に治療される。然し一旦痳病に感染した以上、如何に手を盡しても、感染前の絕對健全の狀態には再び歸らない。「治療の目的は達する」と言ふは、其意味である。夫自身、妻、子供には勿論影響しない程度に全治する、唯だ嚴密な科學的意味に於て言へば感染前には歸らない。以上は私が二十幾年に亙る種々の實際經驗から得た信念である。

女子の痳病に關しては、其病毒の範圍と治療の迅速に依つて非常に相違する。若し痳菌が單に子宮頭、或は外生殖器、尿道だけに及んで居る場合、これは比較的容易に治療されるものである。然し更に進んで子宮から喇叭管を犯して居る場合、殆んど治療は困難である。時に依れば勿論、手術を行はなければならない。

黴毒の場合は全然異つて居る。相手に感染させない、絕對に安全な方法は現在のところ發見されて居ない。黴毒を安全に治療する方法、將來病毒を再發させない確實な方法、子供に全然遺傳させない方法は、現在の科學では尙ほ如何ともすることが出來ない。

それ故、吾々醫師が、黴毒の患者に結婚の許可を與へるか否かは、要するに、其夫なり妻なりが、眞實子供を欲して居るか否かに依つて別れる。若し子供を得る爲めの結婚ならば、先づ許可を延ばさなければならぬ。然し若し子供を目的としないで結婚するならば(但し同時に子供の出來ないことを要する)多くの場合、許可を與へていゝだらう。花柳病と結婚との問題は更

に章を別にして說く。

既に說明した通り、花柳病は、それ自身として頗る恐るべき疾病である。これは決して誇張ではない、大袈裟ではない。世人は眞實の知識を得なければならぬ。先づ餘りに誇張して考へるはいけない。世の中には、痳病又は黴毒に久しく惱みながら完全に治療した者、結婚して妻にも感染せず、生れた子供にも遺傳せず、生涯を幸福に送る者も亦多いといふことを知らなければならぬ。

第二十八章　花柳病豫防

簡單に言へば、妻は夫に感染の危險があると認めた時、接觸を避ける必要がある。然し理由あつて止むを得ず接觸するとすれば、交接の前後に共に豫防洗滌を行ふがいゝ。場合に依つては交接後だけでもいゝが、安全と確實とを期する爲めには、交接前も亦必要である。洗滌すれば、後に洗滌液の幾分が膣內に殘留して、病菌の全部、或は一部を撲滅する。洗滌液は、重鹽化物七グレン半のものを求めて、水二クォート(熱湯、溫湯、冷水何れでもいゝ)に溶解する。而して交接前に小量、半パイントか一パイント位を用ゐ、交接後に、其殘餘全部を用ゐる。重鹽化物の代用として、大匙一二杯の炭酸、同じく三四杯の硼酸を用ゐるも亦便利である。

然し先づ何よりも、花柳病に感染する機會は避けなければならぬ。觸れぬが安全第一である。間接に器具を媒介として感染することの多い事實を知つて、凡べて公衆用の器具は用ゐないがいゝ。

コップを止むを得ず用ゐる場合、唇を其縁に當てないやうにして飲む、平生から其習慣をつける。

手拭も同樣、多數の用ゐる物は極めて危險である。

旅館其他見知らぬ處に泊る場合、寢床の敷布が清潔か否かを注意する。

公衆用のブラシ、櫛、亦同樣である。

齒科醫に治療を乞ふ場合、特に注意するを要する。治療器械の不潔の爲め、往々にして黴毒の感染することがある。黴毒患者は、齒科醫に其黴毒のあることを打明けない。齒科醫も敢て訊かない。それ故、器械の消毒濟にならない間は極めて危險である。同樣のことが所謂美容師等の場合にも言へる。

最後に、特に注意すべきことは接吻である。世の中には相手を選ばず接吻をする者がある。これは殊に若い女子にとつて危險である。私の知つた範圍内でも、直接接吻に依つて、黴毒に感染した實例が、幾百となくある。黴毒患者は、脣、唇、咽喉、頰の内面の粘膜等に白疹を生ずるもの、而かもそれこ

そは接吻に依つて忽ち傳染する。私は現在、夏期休暇中に唯だ一度の接吻の爲め、黴毒に惱んで居る一女學生の治療を引受けて居る。相手を選ばない接吻を避けよ。これは多くの理由に依つて、惡習慣であると云ふ事を知れ。私は若い女子に特に注意したい。

第二十九章　姙娠及び分娩の制限

男女共に、姙娠の豫防、分娩の制限に關する最近の方法を學んで後、初めて結婚すべきである。何等制限の方法を知らない下層社會の者を除き、一般には小數であると信ずるが、制限を一の罪惡であると考へる人がある。これは吾々と共に語るに足らない。若し制限を全然加へないとすれば、或種の家庭には、現在二三人の子供を擁する場合、更に十人廿人の多數を擁しなければならないであらう。但し私は此章に於て、子孫制限說の爲めに詳細な議論を試みようとは考へて居ない。それが單に、他の拙著（姙娠豫防に依る人口制限）に論じたことの反覆に過ぎなくなることを虞れるからである。然し重要な點二三を、此章にも記して置く必要がある。

吾々が最初、主張力說した時代に比較すれば、姙娠の豫防、分娩の制限に關する問題は、現在普く社會の各方面に知られて來た。然し尙ほ主張と同時に誤解が伴つて居る爲めに、輿論となるには至らないのである。先づ第一

に、吾々が强制的に出產を減少する者、人口を制限する者であると考へる人がある。此誤解は明かに誤謬、寧ろ滑稽であるにも拘はらず、信ずる人は頗る多い。吾々が姙娠の豫防、分娩の制限を說くは、事實强制的ではない。單に、種々の理由、例へば經濟上、遺傳上、衞生上等の理由があつて、眞に多數の子供を持ち得ない、持つを欲しない人々にのみ說くのである。若し、夫妻共に健全、遺傳の惡疾なく、養育の資が充分であれば、少なくも五六人の子供を分娩する必要がある。否、たとひ十人十二人を分娩しても、社會は其人口繁殖に對して感謝しなければならぬ。吾々の主張することは、出產といふ重大問題にあつて、養育の重荷を負ふ人は、制限する權利を持つて居るといふことである。制限の方法を知る必要があるといふことである。但し勿論、二人產むもよし、六人產むもよし、十人產むもよし、凡べて彼等に其選擇の權利はある。吾々は決して强制はしない。

避姙に就いて――

避姙は、妻には勿論、夫にも、健康上有害であるとの說は

愚論である。容易に此の說を否定することが出來る。近代の進步した避姙法は、決して有害な影響を與へるものではない。又たとひ有害であると假定しても、(實際は無害であるが)其避姙から生ずる害は、姙娠過多、分娩過多から生ずる害の程度に比すべくもない。正にそれは大海の一滴に過ぎない。

避姙方法の中、あるものは使用するに面倒であり、或は不快である。然しこれは出產の過剩を防止する利益に比すれば、些々たる犧牲ではないか。極めて小額の代償に過ぎない。

避姙に對する最も普通な反對論は、其絕對でないことである。避姙は絕對に確實な方法がない、あらゆる場合に奏效する方法がないと云ふ。此の非難は事實である。然し此の非難をも否定する爲めに、私は左に三つの解答を答へる。第一、避姙の方法を用ゐて目的の達せられなかつた場合の多くは、其方法を完全に適用しなかつたからである。決して避姙其もの、罪ではない。如何に完全確實な方法も、使用の如何に依つては失敗する。罪

は方法になく人間にある。第二、若し避姙が、九十八パーセント乃至九十九パーセントは成功し、後の一パーセント乃至二パーセントは失敗すると假定しても、卽ち絕對確實でないとしても、それだけで喜ぶべきでないか。百度姙娠する代りに一二回以上姙娠しないといふことは、女子にとつて實に幸福と言はなければならぬ。第三、現代の避姙の不確實は、此問題に關する學者乃至識者の沈默の爲めである。若し、此問題が、あらゆる種類の醫學雜誌其他に論議されるに至れば、必ず、近き將來に於て、絕對確實の方法が發見されるに至るだらう。而して何等の疑問も殘らなくなる筈である。然し絕對に確實ではない現代の避姙法も、勿論無きに優ること萬々である。それ故、此章の冒頭に言つた通り、若い女子は、如何にして姙娠を防止し得べきかといふことを、結婚前に性的教育の必要な一項目として擧げなければならぬ。事實、私は女子の性的教育の中、これが最も重大であると信ずる。他の何事を學ばなくとも、これだけは完全に學ぶ必要があると思ふ。何故ならば、これが女子將來の健康と幸福との爲めに、絕對に必要だからである。

三四の實例。――合理的避姙の方法を發見しようと努力した過去二十餘年間に、私は幾千の實例を見た。止むを得ず母親となつた爲めの悲慘な物語、養育の能力を持たないにも拘はらず、姙娠して分娩した爲めの不幸な生活に幾度となく接した。

實例の内、あるものは私の實際經驗、あるものは同じく醫師たる家兄の報告、あるものは廣く各地にある犧牲者自身の報知である。私の注意に慣した實例を、此二十餘年の報告中から取つて編輯すれば、決して誇張でなく、スタンダード大辭典の最近版位の量(而かも細字で組んで)に達するだらう。中には全く涙を落す身の上話がある。人間の愚痴と立法者の無情とに心を、痛ましめるものがある。然し私は讀者の情緒に訴へようとするのではない。特異な、極端な例を採らうとするのではない。唯だ簡單に、平凡な、日常の實例を擧げて、讀者に避姙の知識と、其知識を缺いた爲めに起つた悲劇とを示さうと思ふ。

第一例。此種の例は極めて多く、敢て引例するを辯解したい位である。

假名スミスなる婦人は、九年前に結婚し、當時五人の母親であつた。彼女は聰明な良妻賢母の典型とも言ふべき婦人で、自ら子供の養育を掌り、教育にも仔細の注意を拂つて居た。子供は五人共壯健であつた。然るに次第に彼女の身體は衰弱して來た。家計の豐かでない爲め、一人の下女、一人の子守を使用することも出來ないで、夫と子供と、一家の雜用とに心勞しなければならぬ。彼女の精力と氣力とは涸れて、昔の面影は何處にも見られなかつた。神經過勞の結果は、肉體の上にも著しく影響して、恰も昔の壯健時代の影法師を見るやうであつた。然るに一方、更に姙娠しはしないかとの恐怖が彼女には日々の苦惱であつた。彼女はそれを夢に見た。夜の夢のみではない、晝の生活をも脅かした。此眠られぬ夜、此惱ましい晝、彼女は到底姙娠を無事に通過することは出來ないと、單純に感じた。精神も肉體も、これ以上の分娩には堪へられない。彼女は以前の姙娠中診察を乞ふた醫師に會つて、姙娠の豫防法を乞ふた。然し醫師は笑つて相手にしなかつた。

「御用心が大切です」。彼女は醫師の言葉として、此忠告を受けたきりである。然し如何に用心しても、如何に恐れ惱んでも、結局、彼女の運命は、次の姙娠に導かれて行つた。彼女は姙娠した。勇氣を奮つて再び醫師の門を敲き、墮胎の方法を乞ふた時、不幸にして醫師は尊敬すべき人であつた。「殺人」の方法を乞ふことの無亂を怒つて、却つて彼女を責めた。彼女は泣いて訴へた。然し醫師は動かなかつた。

此場合、墮胎の報酬として僅に二十五弗を支拂ひ得るに過ぎないスミスの代りに、二百五十弗をも支拂ふことの出來る他の貴婦人が、同じ醫師に依賴したとすれば、其結果は寧ろ疑問である。勿論醫師が墮胎の方法を敎へるといふのではない、唯だ一考に價するといふだけである。吾々の知つて居る醫師は特殊な場合に於ける墮胎に關して、豫期する報酬高に反比例して、道德的憤怒を發する。

スミスは兎に角醫師の許から失望して歸宅した。然し出產は決してしないと決心して、何等かの方法を近所の人々に打明けて相談した。近所の

人々は產婆の手を藉ることを勸めた。產婆は熟練しては居ないし、淸潔を守る者でもない。彼女は十日間も產婆の手を煩はして、遂に不幸にも墮胎は不成功に終り、生命さへも奪はれ、二十九歲を一期として死んだ。夫は寂しく殘されたが、やがては新たに妻を求めて暮すだらう。然し母親のない五人の子供は永久に寂しいだらう。人間は妻の代りを求めることが出來ても、母の代りを求めることが出來ないものである。

スミス夫人の場合、かうした悲劇は、餘りに平凡な日常茶飯事として社會の隨處に起りつゝある。せめて神が彼女等の靈に慈悲を垂れて呉れるならばと思ふ。

墮胎に就いて此處に數語を費して置く、墮胎は極めて恐るべきもの、病毒の感染、不健康、慢性的衰弱、死等を屢、伴ふものである。私は特に墮胎の問題を擧げて世人に警告して置きたい。吾々が姙娠を豫防し分娩を制限することゝ、墮胎とは全然別物である。然るに無智な人々乃至無智な醫師の中には、此避姙と墮胎とを同一視する者が往々ある。然し吾々はこれを嚴密

に區別して、世人に此兩者が根本的に相違することを明示しなければならぬ。生命の創造を豫防することゝ、一旦創造した生命を奪ふことゝの相違である。單に度に於て異るのみでなく、類に於て全然異る、此避姙と墮胎とが、殆んで同一視されて、同一の刑罰を受ける場合のあるは實に遺憾である。勿論、墮胎もある特殊な場合には是認すべきもの、止むを得ないものと認めるが、それは別問題である。此處では、要するに避姙と墮胎との區別を混同してはならぬことのみを言ふ。

第二例。青年Aと、少女Bとが戀に落ちた。然しAの收入は妻を養ふに足りなかつたから、二人は結婚することが出來なかつた。二人は勿論、限りなく生れる子供の心配さへなければ結婚したに相違なかつた。Bは幸福な家庭に育つた少女である。贅澤に生活したとは言へないまでも、和樂の間に成人した。亞米利加の青年にとつては、少なくも妻に、其父母の家庭に於て受けた程度の生活をさせたいは、誰しも懷く希望である。而かも此場合、彼女の父は、六人の可愛い、娘達に幸福を與へる爲め、勞働し續けて、遂に

苦しんで死んだ。

既に言つた通り、子供の生れることを恐れて二人は何時までも逡巡した。年毎に、來年は結婚出來るだらう。妻子を養へるやうになるだらう、との希望を繰り返して居た。然し希望は燃えて時は仲々に來なかつた。幾年か經過する。Aの頭髪は稍〻薄くなり、色は灰色を帶びて來た。Bの顏には所所に細い皺さへ生じて居た。而かも尙ほ、結婚の時は來ない。Bは敬虔な信念を持つた行狀の方正な處女であつたが、Aは寧ろ反對であつた。時々、遊里の巷に足を踏み入れた爲め、不幸にも痳病に感染した。彼が學んだ知識の中には、花柳病豫防の項目はなかつたから、忽ち彼は狼狽した。而してそれを全治するに六ヶ月を空費した。かくして二人が結婚した時は、Aが三十九歳、Bが三十五歳であつた。此相愛の夫婦の生活に幸福は訪れたであらうか。悲しいことに、戀の女神は、結婚式の擧げられる時になれば、他用に忙がしいものである。從つて彼等の結婚生活には、殆んどローマンスがなかつた。而かも皮肉なことに、二人の間には子供は生れなかつた。

破壞された生活――私は斯う呼びたい。全く些々たる知識をも持たなかつた爲めに招いた慘めな生活の縮圖である。

避姙の知識を與へようとする吾々の試みに反對する者も、全然馬鹿でない限り、彼等自身の立脚地から此實例を見ても、避姙の必要を感ずるだらう。青年男女に避姙の知識を與へる、これは結婚の期を早くして、娼婦に觸れる機會を少なくし、花柳病の蔓延を防止する。而かも花柳病は、一般の認める通り、人類を自滅に導くものである。

第三例。若い婦人、嫁した夫は酒亂家であり、且つ間歇的に狂氣發作の起る男であつた。毎年、或は一年毎に、數週間或は數ヶ月を、癲狂院に入院する必要があつた。而かも退院すると同時に妻は姙娠した。恰も退院を紀念するかの如く、次々にと妻は姙娠した。彼女は夫を憎み厭つた。然し其抱擁を全然拒否することも出來なかつた。狂氣の發作を遺傳された子供が、次第に多くなつて來る。彼女は醫師に乞ふて避姙方法を求めた。然し醫師は決して相談に乗らなかつた。失望から絶望に陷つた彼女は、遂に自殺

して仕舞つたが、其時既に、六人の子供が酒亂家となり狂氣となる爲めに、成長しつゝあつた。

かうした場合の姙娠と分娩、それは正に人類の敵であり、自滅の幇助者であり、神と人間との法則の破壞者である。彼女が避姙の知識を持つか否かに依つて、結果に霄壤の差を生じたであらう。

第四例。此場合は、恐るべき遺傳的血統を持つ男女の結婚である。醫師は夫を診察して、決して子供を生んではならないと言つた。妻にも警告した。而して避姙の方法をも詳細に教へたにも拘はらず、第一第二第三例の夫婦とは異り、これは二人共にローマン・カトリックの敬虔な信者であつた。其爲めに、避姙は宗教と神とに反するものであると考へて、(恰も、神が不正の人間の無數に生れることを喜ぶかのやうに考へて)醫師の忠告と警告とに耳をも傾けなかつた。而して四人の子供を儲けた。其中の一人は稍暗愚(此點は父母と似て居た)であつたが、兎に角、常態に發育した。二人目は聾者、三人目は片眼の盲者、四人目は全くの痴呆となつた。

此場合、問題は異つて來る。暗愚な男女が結婚して、無價値な生命を創る、姙娠をも分娩をも避けることを敢てしない。これに對して吾々は如何にすべきか。精神的にも肉體的にも劣等な者の子孫を減少させる爲め、優生學上の議論が、更に一般の視聽を喚起しなければならない。

第五例。此夫婦は結婚後八年、子供は五人あつた。當時、妻はこれ以上の分娩に堪へられないと言つた。それよりは寧ろ死を選ぶと決心した。止むを得ず暫時の間は、夫婦共に、交接の最後の瞬間に中止した。然しこれは互ひに不快である。遂に妻は夫を傍に近付けなかつた。夫婦の間に肉體的の關係はなくなつた。夫は勝手に所々の遊里に足を入れ始めたが、妻は勿論それに氣付かない。數ヶ月の後、夫は黴毒に感染して、其爲めに位置を失つた。家庭は紊亂して、妻は自ら職を求めなければならぬ、子供は路頭に迷ふ。――一口に言へば家庭は破壞されて仕舞つた。若し早く彼等に避姙上の知識があつたならば、此結果は起らなかつたであらう。

第六例。青年A、二十八歳、處女B、二十五歳。二人は以前から（數年前）見知

つて居た。Aは地方記者、Bは物語作者であつたが、（かうした職業は、兎角、人を頽廢させ冷笑的にさせる者である）遂に戀に落ちた。相思の二人は、勿論結婚しようとした。然し彼等の職業と收入とが、子供を養育するに堪へなかつた。姙娠と分娩との憂さへなければ、當然夫婦となるべき二人が、互ひに孤獨を守つて機會の來るを待たねばならなかつた。これは言ふまでもなく、肉體的にも精神的にも惡影響を與へる者である。然るに偶然、二人は合理的な避姙の方法を知つて結婚した。而して二人は幸福に暮した。永久に、――卽ち子供を養育し教育し得る時までは、姙娠しなかつた。

此若い夫婦が避姙の知識を得た爲めに、社會は果して害されて居るだらうか。

第七例。青年Cと少女Dと戀し合つて居たが、不幸にも精神病の遺傳が、而かも兩者の血統にあつた。結婚して分娩する爲めには、二人共餘りに高潔な精神を持つて居た。子供に遺傳することは彼等に堪へられない恐怖であつた。二人は獨身で生涯を送る決心を固めたが、相思の彼等にとつて、

これは寂しい悲しい生活であつた。然るに避姙の知識を圖らず學ぶことが出來た。(彼等にとつてこれは天使の齎した知識である)而して夫婦となつた。幸福な生活が何時までも續いた。

此二人が避姙の知識を得た爲めに、社會は果して害を受けて居るだらうか。

第八例。E夫妻、結婚後五年。子供は一人、四歳になつて居たが、明らかに癲癇の徴候を現はして居た。二人は非常に恐れて、種々血統を調べて見た結果、妻の家系に、癲癇の血統があることを確めた。但しそれは可成昔のことではあつたが、次に生れる子供も果して癲癇になるか否か、――二人は一方に肯定し、他方に否定した。然し何よりも安全なことは、次の子供を儲けないことである。二人は夫婦としての肉體的關係を斷たうと決心した。十三四ヶ月の間、彼等は苦しい努力を以て、一度も肉體的接觸をしなかつた。然るに或夜、偶然の機會で、不圖接觸した爲めに、忽ち妻は姙娠した。「此の上、癲癇の發作のある子供を生んで育てるよりは、一層私は死んだ方がいゝ」と

彼女は言ふ。而して親しい醫師を訪れて、萬般の相談をした。幸にして此場合、醫師は事情を斟酌して、流産の方法を特に教へて呉れた。其結果、彼等二人は、再び不幸に見舞はれることもなく、今後の生活を、和樂の裡に暮して居る。流産の方法と同時に、避姙の方法をも學んだからである。

此二人の夫婦が、避姙の知識を得ることに依つて、社會は果して何等かの害を受けて居るだらうか。

第九例。F夫妻、結婚後六年の間に、四人の子供を儲けた子福者であつた。Fの結婚當時、其收入は一週二十二弗、而かも現在も依然として二十二弗である。然るに一方、生活費は、新婚の當時に比して二十五パーセントを增加して居る。且つ四人の子供に食物と衣服とを用意しなければならぬ。(これは、當時夫婦のみの生活を漸く支へて居たと同じく、二十二弗を以て支へなければならなかつた)。此苦しさに妻は、最近六年間に、十六年以上の齡加へて、再び昔の青春の面影は見られなかつた。然し勿論、彼女は子供の凡べてを愛して居た。何物にも代へ難い强い愛を持つて居た。更に次の子

供が生れる心配さへなければ、尙ほ彼女は不幸とは言へなかつたかも知れない。肉體も精神も、これ以上の姙娠には堪へなかつた。彼女は先づ夫の接近するを厭ひ、漸次、寢室を別にするに至つた。夫に何處か他の場所で性慾を充たして呉れるやうにと願つたが、同時に彼女は、夫が放れて行くことは寂しかつた。而して家庭は亂れ始めやうとした。然し、幸にして或書物に避姙の方法が詳細に記されてあつた。其爲めに二人は再び昔の圓滿な家庭に返ることが出來た。

F夫妻が、此場合、避姙の知識を得たことが、果して何人かを害して居るだらうか。若し、何人をも害せず、何人をも幸福にするものであれば、何故これが、此避姙の方法を普及することが、他の罪惡と等しく刑罰に價する、非難に價すると考へられるのだらうか。

第十例。G夫婦は十五年前に結婚した。子供は七人あつた。七人といへば何處の家庭にとつても少數の方ではない。而してこれ等七人は結婚後十一年間に順次生れたものである。最近五年間、彼等は避姙する爲めに、

最初互ひに節慾して居たが、後には或る避姙法を行つて來た。然るに彼等の選擇した避姙法は、近代の學者の凡べてが認めて、男女相互の神經組織に有害であると斷定したものである。言ふまでもなく夫は衰弱し、先づ神經衰弱となり、次に性的不能となり、變狂となつた。會社に通勤することが出來なくなり、妻とは（勿論妻も夫同樣に衰弱して居た）日夜爭ひ續けて居た。別居する爲めには餘りに多くの子供があつた。且つ經濟上の關係はそれを許さなかつた。依然として檻に入れられた犬と猫とのやうに、一緒に暮しながら爭ひ續けて居た。無言の儘、夫は妻を、妻は夫を呪つて居た。然るに或時、偶然合理的な避姙の方法を聞いて直ちに實行した。其後約一ヶ年、夫婦は再び昔の平和に返り、健康と幸福とを恢復した。其結果、最も恩惠を受けた者は勿論、悲慘であつた七人の子供である。

此場合、避姙の爲めに社會は害されて居るだらうか。而かも、若しGに其知識を與へた醫師がありとすれば、此醫師は忽ち捕へられて有罪と宣せられ、一年か二年、或は五年の入獄を見なければならぬ。彼は果して其刑罰に

相當する者であらうか。即ち、私は此處に十箇の實例を擧げた。これは極めて明瞭、極めて簡單な實例であり、幾千幾萬の場合を代表する例である。而してこれは、避姙の知識を普及することを罪惡と認める法律の、如何に殘酷であり野蠻であるかを、適切に證明するものである。かゝる法律は當然破棄さるべきではなからうか。勿論破棄すべきである。

第三十章　新婚の夫婦に

私は從來、多くの男女に接して、親しく其告白を聽いて來た。其點に於ては何人も私に及ばないだらうと思ふ。結婚生活の破壞、家庭の紊亂、離婚の不幸等を順次に釀す理由の殆んど一切を私は研究して來た。多くの場合、夫が妻を棄てゝ他の婦人に走る第一歩は何であらうか。勿論、私は男子の多妻的傾向を認める者であるが、それ以外、夫が娼婦其他の女に戯れる最大原因は、妻其ものにある。多くの場合、罪は夫にない、妻にある。――此ことを凡べての婦人に教へたい。妻の多くは、自ら夫を他の婦人に走らせながら、其結果、夫の冷淡と家庭の空寞とを嘆く。私は以下數頁に亙つて、結婚生活を破壞する幾多の暗礁を指摘し、且つ夫の愛情と誠實とを永久に保つ爲めの策を、讀者に教へたいと思ふ。

此章は勿論凡べて妻を對象として書いた。然し夫に對する忠告も含まれて居る。其點は妻が夫に注意せしむればいゝ。

結婚生活の最も大切な時期は、最初の數週乃至數ヶ月である。結合の鞏固、將來の幸福は、多く此時期の生活如何に依つて定まるものである。先づ最初、夫は妻を、妻は夫を、或程度まで理解することを要する。若し夫が、妻の不快なこと、妻のすべからざることを強ひる時、直ちに拒絶しなければならない。習慣にならない内に防止するは、習慣になつてから破壞するよりも遙かに容易である。

妻の個性を立てること。

妻に對する忠告の第一は個性を立てるといふことである。これは極めて陳腐ではあるが同時に重要なることである。卽ち多くの男子は、其結婚前の妻に對しては、騎士的の尊ぶべき態度を以て接する。然るに結婚式を擧げると同時に一變して傲慢となり尊大となる。彼等は、妻が獨立した人間ではないと認めて居る。妻は名前を失ふと同時に、其一切の權利、主張、趣味、友人等を失ふ者だと考へられる。夫に寄生する者、能力のない者とされる。妻は、依然として獨立した人間であることを主張するがいゝ。個性を立

てるがいゝ。但し私の言ふは、結婚の最初から、夫と爭へと言ふのではない。私にとつて最も厭ふべき女は、かの喧嘩好きの、常に武裝して所謂權利を主張する爲めに二六時中叫んで居る式の女である。それ故決して私は爭へとは言はない。女らしい柔順と着實とを以て、自己の個性を立てよと言ふ。同時に妻は、多くの夫が、我儘な行爲をする事實を知らなければならぬ。それは男子の惡意ではない、單に痴愚と稚氣との結果である。時には無意識のことさへある。妻の個性を壓迫し、或はそれを破壞しながら、而かも眞面目に、妻の利益を計りつゝあると考へる者さへある、「彼女の爲めだ」と彼は言ふ。夫と眞面目に話して居る時、屢、驚くべき結果を生ずる。夫の思想を一變させることさへある。然し若し不幸にして夫が愚物である場合、妻は何等夫に期待することが出來ない。一切放擲するより外方法がない。

性的關係に對する妻の態度。これは非常に微妙なる問題である。しかし看過することの出來ない問題である。何故ならば此態度の如何に依つて夫の態度の如何が生ずるからである。夫をして妻を放れしめる原因は

一二に止まらないが、其最も主な原因は、性的關係に對する妻の態度が間違つて居ることである。

性的關係といふ意味は、妻が結婚に伴ふ義務、卽ち交接の意味である。然るに女子の中には、交接を煩はしいもの、苦痛のもの、出來るだけ早く終りたいものと考へる者が頗る多い。夫の此要求を堪へ難い負擔であると考へ、不快な野蠻な行爲であると感ずる。其最初も最後も極めて冷淡である。此種の女子には勿論、種々の原因がある。其詳細を此處に說くべきではないが、極めて簡單に言へば、先づ第一に先天的冷淡性の女子である。熱情なく、慾望なく、快感なく、寧ろ性的不具者である。勿論憎むべきでなく、非難すべきでない、憫れむべき者である。然し、かゝる種の女子にしても尙ほ、夫の要求を拒絕しない態度を採ることは出來る。

第二の原因は誤つた敎育の罪、卽ち交接を不潔な卑陋な動物的行爲と認めることである。かゝる種の女子には改めて說明する必要がある。而して彼女が馬鹿でない限り眞理を解する筈である。元來、此誤謬は精神に異

狀のある、特殊な少數の者が、交接を單に繁殖のみの用であると解して、主張した結果である。少年が青年になり、性的行爲が必要となると同時に許されると。然るにそれ以前は、これが罪惡、「汚れたる行爲」「神の冒瀆」云々である。若し妻がかうした敎育を受けて居たならば、夫は同情に價しない。男子は結婚前に、妻が性的關係に對して如何なる思想を抱いて居るかを知悉する必要がある。然し、不幸にも、此重大問題が等閑に附せられて居る。而して結婚後、漸く夫婦の正反對に立つて居ることを知る。私はかゝる場合、簡單な談話、又は簡單な手紙の往復を以て、將來の不幸を未前に防止した實例を知つて居る。

第三に女子が性的關係を拒絕するは、姙娠を恐れるからである。此場合は、妻の態度も、前者とは異つて正しい。然し避姙の方法さへ學べば容易に態度を改めることが出來る。第四の原因は疾病、局部的に缺陷ある者、不具者等の場合である。

以上、女子の性的關係を嫌惡する理由は種々あるが、凡べて治癒して常態

を復すとの出來るものである。或者は醫療的、或者は心理的、或者は單に常識を以て親しく語り合つて矯正することが出來る。

私は女子の爲めに特に繰り返す。――決して夫の要求を拒絶してはいけない、少なくとも餘り屢〻拒絶してはいけない。性的關係の屢〻行はれて夫妻共に快感のある家庭は、其反對の家庭よりも確かに幸福である。

然し乍ら、勿論、妻が反對に夫を强ひてはいけない。要求過多は共に不可である。男子にとつては女子にとつてよりも、交接が重荷である。肉體的にも精神的にも著しく疲勞する者である。其知識のない妻は、夫を强ひて却つて將來の不和と不幸とを招きつゝあると言つていゝ。卽ち現在の爲めに將來の全部を犧牲にする。夫は飽滿と不能とに陷り易い。其結果、妻が節慾、する以上の長期間を、止むを得ず禁慾しなければならなくなる。それ故、如何なる場合にも、節制は極めて重大なことである。極端は何れもいけない。熱情を以て、互ひに抱愛し、適度の性的關係を持續すること、それが最も結婚生活の長い幸福を齎すことである。

下衣の清潔。此問題は本書に於て特に說明すべき問題ではないと考へられるかも知れない。それ程些々たることだと考へられて居るが、結婚生活の重大な意義は、蓋し、此清潔な下衣を着ることの中に含まれて居る。妻は出來る丈け美しい、而して清潔な下衣を着るがいゝ。殊に寢間着は、スカート、帽子等の裝飾以上に工夫を凝すべきである。然るに大抵の婦人が、此事實を無視する。外出用の衣服のみを美しく調へて、下袴、股引、下襯衣等を顧みない。婦人は先づ下衣を注意して後、上衣を注意すべきものである。

婦人の美感を保つこと。妻の中には、既に結婚した關係だから、夫に對しては美感も醜感も無視していゝと考へる者がある。他人に見られたならば慚死すべきことをも、夫の面前では何等の躊躇もなく行ふ。例へば(引例が聊か不快ではあるが)臆面もなく便所に立ち、月經に汚れた布巾等を見せる。勿論、夫の氣質に從つて、或者は全然氣に掛けないが、或者は非常に不快を感ずる(總じて女子よりも男子の方が美感を尙ぶ)。夫が妻に對して冷淡になる原因は、往々妻の野卑な醜い態度にある。交接は極めて微妙な作用

である爲め、些々たる障害に依つても亂される。卽ち夫が妻の排尿頻繁の事實を知つた爲めに、忽ち慾望の消失することもある。或男子は私に話した。妻が月經中に局部に襤褸を詰めて居る事實を偶然發見して、其結果、數ヶ月間も接觸する慾望が起らなかつたといふことである。讀者の中には注意するに足りない瑣事ではないかと言ふ人もあらう。然し人生は瑣事の連絡を以て終始する。殊に結婚生活に於てさうである。

口の惡臭。愛の結合に對する最も危險な疾病とも言ふべきものは、口の惡臭である。有毒瓦斯が小植物を枯死させるやうに、これは愛の樹を枯死させる。烈しい熱情を冷却させる。單に口臭のみの理由、他には何等の理由もなくして離婚される場合は、驚嘆に價する程多い。それ故、若し不快な口臭のある妻は、直ちに醫師に乞ふて治癒しなければならぬ。治療期間が、たとひ如何に長くとも、全治するを保せなければならぬ。それが將來の幸福と不幸との分岐點ともなるからである。

口臭以外の惡臭。他の惡臭も亦非常に不快なものである。然しこれは

特に醫師の手を要しない。日常の入浴を多くして、常に清潔を保つことが同時に其療法である。女子共通の臭、女の臭は却つて快感を覺えるものである。男子に對する魅力を增すものである。然し生殖器、足部、腋下の惡臭は適當な處置を加へる要がある。同時に、香水、香粉等を用意して臭を調和するがいゝ。

足の發する臭氣を防ぐには、左記の方法を用ゐる。朝夕二回フォマルデハイド（無色瓦斯）一オンス（大匙二杯の分量）を溶かした水盤中に足を浸して洗ふ。丁寧に拭つて後、左記の粉藥を塗布する。サルチル酸一ドラム。硼酸一オンス。乾燥明礬二オンス。タルカム四オンスの混合である。これは最も簡單、安價、的確である。而して此小量を毎朝靴下の中に入れて、靴下を一日に一回乃至二回取代へる。此粉藥は腋臭にも效果がある。

口臭に就いての療法は記さない。これは原因が一樣でないからである。鼻を原因とすることもあり、口其もの、齒、咽喉、扁桃腺等から起ることもある。胃病、肺病、時には過食から生ずる場合もある。それ故、原因の異るに從つて、

或場合に效果があつて、他の場合に效果のないことが多い。醫師に就いて病原を確かめた後、適當な方法を採るより方法がない。

白帶下。男子の中には、妻が白帶下に惱んで居る事實を知つて、交接の出來ない者がある。其爲めに性的能力を奪はれる。非常に不快を覺えると同時に慾望が消失する。

今日、私を訪問した婦人がある。結婚後五ヶ年になる。結婚前、十五歲の時から彼女は白帶下に惱んで居た。結婚後三年間は極めて幸福であつた。然るに或時、殆んど無意識に白帶下の多いことを夫に打明けた。と同時に夫の態度が變化した。而してそれ以後、妻と接觸しなくなつた。妻は種々の試みをしたが、結局、失敗に終るのみであつた。妻は、夫が心ならずも接觸しないで居るのだといふことを知つて、醫師にも掛り、賣藥をも求めたが、效果は空しかつた。若し白帶下が全治しなければ離婚するかも知れぬと妻は恐れた。其結果、私を訪問したのであつた。白帶下が若しあれば、直ちに全治する必要がある。同時に夫に打明ける必要はない。單に不快を唆る

のみだからである。

其他の注意。戯れてはいけない。夫は屢、誤解する者であるから。事實の如何は別として、「だらしない女」の惡評を受け易い。但し、常に謹嚴な態度を以て夫に接し、或は眉をひそめて他人に接せよと言ふ意味ではない。親しみの表情と、戯れの表情とは別である。常に、戯れを棄てゝ親しみを採る。然し、夫の心が妻を放れ掛けたと考へられる時には、多少の戯れも必要である。戯れることが、或暗示、――永久の所有物であると夫の考へて居る妻に、媚を賣る男子も多いといふ暗示を、夫に與へる。而して再び夫の愛を恢復するものである。

夫を自墮落にさせてはいけない。或る夫の中には、妻を淑女として待遇しない者が多い。(一時的には淑女として遇する者もあるが)「淑女ではない、妻に過ぎない」とは屢、聞く冗談である。然し冗談でなく、眞面目にさう考へて居る者が多い。妻の前では、如何に不潔なことでもしていゝと考へて居る夫がある。かゝる夫に對しては、清潔が性的に制限された屬性でないこ

と、即ち、夫が妻に清潔を要求するやうに、妻も亦夫の清潔を喜ぶ者であることを理解させなければならぬ。世の中には潔癖な女も多い。而かも夫の、不潔に惱みながら、全然何事も口にしないで、澤山だと考へて居る。これは非常な矛盾である。

性的知識 終

索引

ア

アカデミック論……一七八
アミーバ……七
アルカリ反應……一六

イ

醫師の所謂定説……三二三
一般教育外の性欲教育……一八六
陰核……二〇八
陰莖……一三〇
陰莖畸形……五二
陰莖脚……一〇
陰莖壞疽……一三四
陰莖と精巢（睾丸）……八
陰莖瘰癧……五一
陰體……一〇
陰裏繃帶……一五二
陰阜……二〇八
陰部洗滌……二七二

エ

歴世思想……二九三

オ

オイレンブルヒ（人名）……五
男の戀は生涯中の一部に過ぎぬ……一九五
親達の子供に對する觀察力……二八五
オンス……二二三

カ

海綿體……一〇
角膜炎症……一〇九
加答兒……一六六
割禮（包皮截去）……一三五
家庭教師と小供……三五
姦通の危險……一八〇
箝頓包莖……一三四

ガ

眼痳……一六一
眼痳と盲者の關係……一六〇

キ

丘疹……一三九
急性攝護腺炎……一四二
記憶力減退……三二
寄生體……二三七
龜頭……一〇、一三四
龜頭炎……一三五
恐怖と性的不能……五六
局部の腸癆……三〇七
去勢……一四
去勢と年齢……一四
禁欲……一六四
禁欲……五四

ク

空洞體……一〇
クオート……二二九
クレーデ教授……一六二
花柳病……七四、一八七
花柳病患者の百分率……七五
花柳病と其豫防……七八
花柳病と醫師……一九二
花柳病と化學的藥劑……八四
花柳病と結婚……一三九
花柳病と新聞……九七
花柳病者の誇大的百分率……七五
花柳病の性質、經過及び徴候……八九
花柳病の範圍……一八九

グ

外生殖器……二〇八
外部生殖器……八
グラフー氏腺胞……二〇七
グリセリン灌腸……二四一

ケ

經水の量……二三
血液檢査……一一三
血管怒張……二四四
結婚前迄の童貞の可否……三四四
結婚と口臭……七七
血帶下素人療治……一八七

ゲ

劇然な性欲衝動……五七
月經異狀……二三四

月經過多……二三四
月經困難……二三五
月經現象の説明……二二八
月經終止……一六八—一七二
月經時の衛生……二三七
月經と休校……二三〇
月經と年齢……二一九
月經時の交接……一六六
月經の血液は何處から來るか……二三
「月經」の語原……二二一
月經は何日間續くか……二二三
月經は何歳から起るか……二二二
月經は何歳まで續くか……二二二
下痢……一三六

コ

虹彩炎……一〇四
交接中止……五五、九五
交接の必要條件……四八
交接不能……五〇、一五七
後天的眼痳……一二、一六、一七
コーペル氏腺……一二、一六、一七
幸福な結婚の根本條件……一七一
白帶下……一八一、二四三
白帶下と賣藥……二八六
白帶下の一般療法……二八三
白帶下の局部的治療……二八四
白帶下の原因……二八二
骨盤……二〇四
子供の性欲教育は人間の性欲を對象とせねばならぬ……一八七
コルセット……二八三
コンドム……八一七
コンドムと黴毒……八二

ゴ

ゴノコッケン……一四一、一四〇

サ

細胞分裂……二三三
酒と花柳病……八四
サプリメージアン……一六八
サルヴルサン……一一六
産道……一六一
産期計算法……二三五

シ

私生兒と女子……一九四
小兒の性的教育の必要……二〇八
手淫……一九八、二四、五〇、六三、一四八、二七三
手淫過多……一六八
手淫過度……一七四、二〇三
手淫者の顏面特徵……二〇三
手淫者の百分率……一八四
手淫と衣服……二六〇
手淫と開始期……二〇〇
手淫と割禮……二三三
手淫と高熱湯……二一四
手淫と罪惡……四九
手淫と疾病……二一二
手淫と中世紀思想……一〇二、二一六
手淫と道德觀念……二一〇
手淫と兩親の態度……二一〇
手淫の豫防……二一
手淫は習慣に過ぎず……一八八
手淫癖……二六七
手淫癖（女の百分率）……二六九
手淫癖の豫防……二七四
射精……二七七
小陰唇……四九
消化器的徵候……二〇八
昇華……六六
處女膜……一六八
處女膜と處女……一七四、二〇三
宗教的雰圍氣……二〇二
習慣性流產……一八四
子宮……二六〇
子宮外姙娠……二〇〇
子宮出血……二三三
色欲缺乏……二一四
『思想乃至感情には責任がない』……四九
シャウザン及びホリマン……二一二
春機發動期……一〇二
春機發動期と結婚期……二一〇、二一六
春機發動期と少年期……二一〇
「春機發動期と同時に性的區別は生ず」との說の誤謬……二一
神經衰弱と仕事……六七
神經衰弱と憂鬱症……六九
神經的雰圍氣……二一九
新婚の夜……一七三

ス

スピロヘータ・パリーダ……一〇一、一一八
スピロヘータ・レフリンゲン……一〇一

ズ

頭腦軟化……一〇七

セ

精液……一六、一五四
精子……八、一七
精子の形狀……一八
精子の構成……一九
精子の數……一八
精子の生存競爭……二三三
精子の速力……一九
生殖器萎縮……六二
生殖器缺損……五一
生殖器（女子）の解剖……一九九
生殖不能……七一、一五六
生殖不能と耳下腺炎……七二
生殖機能と性的機能の差……二七〇
生殖不能の原理……七一
精神的手淫……二八〇、三九
精神四散……一九〇
精神的變化……二一八
性的關係に對する妻の態度……三三九
性的神經衰弱……一四七
性的神經衰弱及び其原因……五九
性的神經衰弱と氣分……六八
性的神經衰弱と仕事……六七
性的神經衰弱と勞働……六〇
性的不能……四八
性的本能の區別（人間と動物との）……六
精巢……一四一
精巢（睾丸）……六二
精巢萎縮……五二
精巢異常……五三
精巢懸留……七一
精巢の大きさ……八
精巢の重量……八
精囊炎……一五七
生命の創造……三三六
性欲教育……一八三
性欲教育の開始期……一八五
性欲教育の順序（二十歲—廿五歲）……一九一

性欲衝動……二一、四八
生欲生活……五〇
性欲と飲食物……四五
性欲と家庭……一八四
性欲と藝術……五七
性欲と文藝……一六九
性欲と年齢……五三
性欲と憂鬱症……一九〇
性欲の節制……一六四
性欲本能……二二
性欲本能に關する二說……一六五
性欲滿足の自由と人間本能……一六五
脊髓病及び癲癇狂……一〇五
攝護腺……一二
攝護腺充血……五一
攝護腺除去……一五一
攝護腺の膨脹……一四八
攝護腺の作用……一五
攝護腺分泌液に對する誤解……一七
腺炎……一三六

ゼ

ゼラチン……二五一

ソ

早漏……五一、一五九
鼠蹊腺炎……一三六
ソプラノ……二一〇

タ

胎兒の成長順……二四九
胎盤と臍帶……五二
タイモル・アイオダイド……二五六
『只だ神だけが知る』……一四二

ダ

第一變調……一〇一
大陰唇……二〇八
第三期變調……一〇四
第二期變調……一〇二
墮胎……二五九
Damaged Goods(ブリュー氏著)……二二四
男女接觸度數……一七五

チ

乳の分泌中止……二五七

直腸疾患……二四三

ヂ

靜脈……九
靜脈腫……一五二
條蟲……一八七
ヂュクレー・ウンナ菌……二二
ヂュクレー博士とウンナ博士……二三三
受胎と經過……二三一
循環器的徵候……六六
女子性的教育の二重的必要……二二四
女子に課せられし刑罰……一九七
女子の特徵……二〇六
腎臟炎……一五〇

ツ

惡阻……二三九

テ

「定年を過ぎての禁欲生活」の可否……一七〇
適度なる手淫……二六

ド

道德意識と賣淫者……一八一
導尿管……一五〇

ナ

內生殖器……一九九
ナイセル教授……九〇
軟性下疳……二二一—二二三
軟性下疳の潛伏期……二二二

ニ

乳頭龜裂……二五六
乳頭の注意……二五四
尿道炎……一四〇
尿道……二三六
尿道加答兒……一七六
尿道狹窄……五一、一三七
尿道狹窄及び徵候……一五八—一五九
尿道狹窄と生殖作用……七三
尿道の黴毒性潰瘍……二二一
肉體的手淫……四〇
二種のコンドム……八二
姙娠と食欲……二二九

姙婦の特徴……一四〇
姙娠過程(黴毒性婦人の)……一一六
姙娠豫防と人口制限……三一八
姙娠と便秘……二四〇
姙娠の異状……二三八

ネ

Never told tales (書名)……一二四

ノ

膿腫……一四四

ハ

肺結核……一四一
胚種……二四三
排尿度數……六五
排卵作用……二一七
母親と眼麻……一六二
ハッチンソン齒……一〇九
ハベロック・エリス(人名)……五
繁殖器……一九九
繁殖補助器管……二〇四

パ

賣淫者が凡べて花柳病に罹つて居るとの説は誤謬である……一八一
賣淫と花柳病……一八〇
賣淫と社會問題……一八〇
賣淫の起原……一八〇
黴毒……九七
黴毒遺傳性……九八、一〇八
黴毒各期の分界線……九九
黴毒潛伏期……九九
黴毒全治の條件……一二七
黴毒療法……一一六
黴毒治療期間……一一八
黴毒治療と年限……一一九
黴毒と齒科醫……三一六
黴毒に對する水銀の効果……二四
黴毒の經過……九八
黴毒の徴候……一〇九、一三一
バイロンの詩句……一九五
黴毒は如何にして感染するか……九八

パ

バイント……二八五

バイント……二四一
パリーダ……一〇一

ヒ

泌尿器的徴候……六四
避姙法……三一九
避姙法と法律……三一六
避姙法を知らぬため起つた悲劇……三一二
ピルシュフェルド(人名)……五
貧血及び癲癇……一三一

フ

ファロピウス(人名)……一〇〇
ファロプアン管……一〇〇
夫婦別居論……一一七
フォーレル(人名)……五
フォカルニエル……一五
副精巣炎……一五四
副精巣炎の徴候……一五五
雙兒の原因……一三四
不姙症……一六五
不姙原因……一六六
不眠症……一六九
フリッツ・シャウヂン……二〇七

ブ

ブラッシュコ博士……八二
ブロッチ(人名)……五
分娩過多……三二〇
分娩前の注意……六一
分娩の制度……三一八

プ

Puber……二一六
プロタルゴール及びアルヂロール……八四

ヘ

獣兒尼亞……五二
變態的習慣……二三
扁桃腺……三〇八

ホ

包莖……五三、一三四
疱疹……一三八
包莖と交接……五三

包皮切斷(割禮)……七八
包皮切斷と其起原……七九
包皮切斷と人種……八〇
哺乳中の月經と姙娠……二五七

ボ

膀胱加答兒……一五〇
房事過度……五三、一四八
母體教育と實例……二六二
勃起苦痛……一三六
勃起微弱……一五九
勃起彎曲……一三七

ポ

ポッタシウム硝酸鹽……五五

マ

マアキウセ……五
痲痺狂……二一四
慢性攝護腺炎……一四四—一四五

ミ

妙齢期……二〇八
明礬挿入……二八四
ミリアム・シー・ゴウルド……二九二

ム

夢精……五一、六二、一三六
夢精と記憶力……四四
夢精と貪欲……四二
夢精(又は遺精)……四一

メ

Menses……二二一

モ

モーゼ……七九
モール(人名)……五
モルヒネ……二二五

ヤ

山師的醫師の常套手段の例……一三〇、一三一、一三二

ユ

輸精管……九
輸精管と痲病……七二

ヨ

横痃……一三六
羊膜……二五二

ラ

喇叭管……二一〇
喇叭管の機能……二〇八
卵子の數……二〇六
卵巣……一九九
卵巣の機能……二〇五
卵狀腺體器管……八

リ

流産……二五九
流産の原因……二六〇
僂麻質斯……一六〇
リコード……一四二
リコール(人名)……九八
リトレ氏腺……一七
痲菌……九〇
痲菌と眼病……九三
痲菌と潛伏期……九〇
痲病……五一、一三六、一九七
痲病經過の種々期……九三
痲病處置一般的方法……九四
痲病自宅療法……三〇一
痲病全治の條件……一二五
痲病手療治の不可……九四
痲病と飲料……九六
痲病と食物……九五
痲病と攝護腺膨脹の關係……一四九
痲病の症狀……二九九
痲病不治論の誤謬……九三

レ

レゾルチン……二四四
レフリンゲン……一〇一
戀愛結婚……一七二

ワ

ワセリン……二四四
「私は何處から來たか」と云ふ子供の問に對する親の答辯……一八六
ワッセルマン氏血液檢査……一二八
ワッセルマン氏檢査と絶對値價……一二九

索引終

大正八年六月二十五日印刷
大正八年六月三十日發行

大日本文明協會刊行書
性的知識

編輯兼發行者　大日本文明協會
右代表者　市島謙吉
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地

著作權所有
非賣品

發行所　東京市牛込區水道町三十八番地
大日本文明協會事務所
電話番町三五四二番
振替口座東京二一八九〇番

次卷豫告

英國ヂェー・エリス・バアカー原著　（七月刊行）

經濟的經國論

（第四十三卷）

J. Ellis Barker:—Economic Statesmanship.

世界戰の終止は將に來るべき國家的經濟戰を意味す。近時隨處に起りつゝある勞働問題の如きも此所に受胎された一事相と觀るを得る。然も此等經濟的諸問題の適切なる解決と否とは將來國家の世界的地位を決する一準據となる。英國斯界の泰斗たる著者は夙に想を玆に致し本書中近代英米佛獨の發達と其の缺陷とを經濟的に批判論述し餘す所がない。苟も經國の何たるかを識らんとする人には此世界的名著を机邊に薦むるに躊躇しない。

要目

鐵及石炭と世界統御權—英國運輸及農業制度の欠陷—教育と經濟的成功—戰後の勞働及資本問題—稅率問題—經濟的立脚地より觀たる佛國の將來—アルサス・ローレン問題—經濟的立脚地と伊國の將來—獨國と賠償問題—米國の將來と其自然富源等

大日本文明協會

臨時刊行書目

（本會々員の特點直接注文者に限り定價の二割引にて提供仕候）

—(新型袖珍叢書第一編)—

米國シャーロット・ギルマン女史原著

新刊

生活と兩性問題

新型袖珍版約四百頁定價壹圓六拾錢　送料内地八錢

要目

兩性間の不自然なる經濟關係—兩性經濟關係の由來及其影響—近世經濟界の發達と兩性經濟關係—社會進化と兩性關係の變遷—婦人界の新機運—結婚と家族及家庭—家事分業の必要—新家庭の組織—兩性經濟關係の精神的影響等

婦人の獨立解放の機運日に動きつゝありと雖も婦人が經濟的に獨立し生活の安全を得ざる限りはその實現期すべからず。本書は自覺せる巾幗操觚者が徹底せる眼光もて此問題を論ぜる新社會人士必讀の良書なり。

—(新型袖珍叢書第二編)—

米國ハリエット・ビイ・ブラッドベリー女史原著

新刊

文明と女性

新型袖珍版約四百頁定價壹圓六拾錢送料内地八錢

要目

女權擴張運動—愛の起源—印度教に於ける愛と法—儒教（孔子教）と孝の德—日本藤原時代の女子—日本人の生活の暗黑面—回教の理想—異教的歐洲の女子—武士道及びその結果—家庭生活—近代の趨勢—優生學と人種的自殺

本書は文明を背景とせる世界婦人史なり。從來男性に代表せられし人性發展の記錄は本書を得て始めて表裏全し。而して殊に日本婦人を說くこと頗る努めたるものありて言皆肯綮に當る。敢て一讀を薦む。

—(新型袖珍叢書第三編)—

新刊

多妻主義の研究

ウォルタア・エム・ガリカン氏原著

新型袖珍約四五〇頁　定價金壹圓六拾錢　內地送料八錢

要目

ハレムの起源—古代のハレム—マホメットと一夫多妻—古猶太の一夫多妻—印度の婦人—婦人の崇拜物と戀愛—ゼナヽ協會—印度婦人と聖典—印度婦人の無能—印度に於けるマホメット婦人—緬甸に於ける婚姻—ゼナヽ協會の使命—トルコ帝室のハレム—トルコ社會の一夫多妻—トルコに於ける婦人崇拜—現時の埃及に於けるハレム等

本書は、著者が多妻制度の國家社會にて睹聞せる處を自家の學術眼にて案排せるもの。多妻主義の是非は一定せるが如くなるも、今猶ほ紛々たり。殊に歐洲大戰の結果民族補足の策として多妻制度の必要の唱道さるゝに至れるが如き、理想論上の可否を容さゞる實際的問題なり。此問題を根本的に解かんと欲する人は、乞ふ本書に來れ。

—(縮刷文明叢書第一編)—

縮刷

民族心理及群衆心理

ギユスターヴ・ル・ボン氏原著

菊半截約四五〇頁　定價金壹圓五拾錢　送料內地金八錢

要目

（民族心理）＝現代の平等思想及び歴史の心理的要因——種族の心理的性格——種族の心理的性格は如何にその文明の各要素の上に發現するか——性格の結果として見たる各國民の歴史——種族の心理的性格は如何に變化するか——種族性格の解敗及び種族の衰頽——（群衆心理）＝群衆と民衆との差別——群衆の時代——群衆の心意——群衆の意見及び信條——各種の群衆の分類及び其細說

本書は佛國の碩儒ギユスターヴ・ル・ボン博士の名著『民族發展の心理』及び『群衆の心理』の合卷なり。『民族心理』は心理學上より種族的性格の存在及び歴史的種族の成立を論じ延いて國民性の發達及び一國文明の要求に論及し、その變化の原因結果竝びに衰滅より種族の滅亡に結論したる心理的文明史たり。且その人間不平等論は思想史上一新紀元を劃す。『群衆心理』は「社會の發達は群衆の時代を形成す」といふ事實により群衆の心的現象の特質を研究して社會萬般の事善惡となく、一に群衆の力によるものなるを說き群衆指導及群衆教育を論ぜる快著たり。過去五ヶ年有餘を經過したる國民的大戰爭も、今や平和の一階段に進み、正に世界全圖は改版せられんとす。而して民族竝に群衆心理が如何に平和の上に其結果を齎せしかを知ると同時に、此際に於て政治家竝に法律家は云ふ迄もなく、一般國民の必讀すべき唯一書たり。敢て推奬す。